

2019

ライブラリー

目 次

図書館の誕生—アレクサンドリア図書館をめぐって……	経済学部分館長 根村 直美…	3
電話ボックスから図書館に……	分館運営委員会 委員 リチャード パウエル…	6
わたしのおすすめ本 ……	分館運営委員会 委員 櫻井 研司…	9
わたしのおすすめ本 ……	杉原 茂…	11
読書について……	常木 淳…	20
私のおすすめ本 ……	常木 淳…	22
私のおすすめ本 ……	小田 圭一郎…	24
いま本を読もう……	黒川 剛…	26
一サラリーマンにとっての本と図書館……	中垣内 隆久…	28
即効性のない本 3冊……	中垣内 隆久…	30
おすすめの本……	野方 大輔…	33
私のおすすめの本……	横井 のり枝…	35
おすすめの本……	岡島 慶…	37
図書館と学生時代・私のおすすめ本 ……	太田 瑞希子…	39
本と暮らした日々……	大橋 賢裕…	41
歴史のおすすめ本 ……	高草木 邦人…	43
私のおすすめ本 ……	Caroline Hutchinson…	45
令和元年度のまとめ……		48
令和元年度図書館ガイダンス（基礎研究）アンケート結果……		54
※資格・肩書は令和元年度による		

図書館の誕生—アレクサンドリア図書館をめぐって

日本大学図書館 経済学部分館長

根村 直美 教授

(倫理学)

“読書離れ”が言われて久しい。文化庁が2014年3月全国の16歳以上の3,473人を対象に実施した「国語に関する世論調査」⁽¹⁾では、電子書籍を含む読書量の変化などについて尋ねている。それによると、マンガや雑誌を除く1カ月の読書量は、「1、2冊」と回答したのが34.5%、「3、4冊」は10.9%、「5、6冊」は3.4%、「7冊以上」が3.6%だったのに対し、「読まない」という回答が47.5%と最も多かった。確かに、これは、「読書離れ」といわざるをえない状況を示すデータと言えるであろう。

このような状況に直面し、図書館は、色々なイベントを行うようになっている。例えば、東京都中央図書館について見てみよう。そのホームページによれば、5月には、財務省関東財務局が子育て支援の一環として実施している出張講座「ママ・パパのための将来に備えたマネー講座～家庭と日本のお財布のはなし～」が開催されている。また、7月には、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に向けて、日本の文化について理解を深めるとともに、国内外に発信するための取組の一環として講演会「立川流真打が語る落語の魅力」が開催されている。図書館は、今、人々が集い、情報を交換する場を提供するための新たな方法を模索しはじめている。

講演会などの形で情報交換の場を提供していくことには、いわば、話し言葉を用いたコミュニケーションの場を提供することである。そうした場を提供することに一定の意義があることを否定はしない。しかしながら、図書館が「話し言葉」を通じた情報交換の場という機能を持ちはじめたからこそ、図書館とはどのようなものとして始まったのかを振り返ることにも意義があるだろう。

そこであらためて目を向けてみたいのは、古代最大の図書館と言われるアレクサンドリア図書館である。『知はいかにして「再発明」されたか』⁽²⁾を書いたイアン・F・マクニリーとライザ・ウルヴァートンによれば、この図書館建設に着手したデメトリウスはアリストテレスが創始したアテネのリュケイオンの学徒であり、アレクサンドリア図書館はアリストテレスがその本において行おうとしたことを非常に大規模に展開した施設であった。というのも、アリストテレスは、互いに相争う立場を統合するために、学問は文字によっ

てなされるべきだという立場を取ったからである。そして、デメトリウスも、口頭による議論ではなく、テキストの分析や統合の上に学問を打ち立てるべきだと考えていた。実際、どこの図書館でも、対立した考えが述べられた文書が一箇所に並べられている。際限なく続くばかりでなく、より一層対立が激しくなる話し言葉での議論に対し、あらゆる立場の居場所を確保する知的空間を作ることで、その状況を整理しようとしたのが図書館というわけである。

ちなみに、マクニーリーとウルヴァートンによれば、様々な王朝が出来ては消えたにもかかわらず、中国文明が統一性を維持できたのもまた、書き言葉のシステム、文字の伝統のおかげだったという。様々な方言を話す中国の学者たちは、面と向かってわかりあうことはできなかったが、書き言葉の世界で意思疎通し、そのことが彼らを強く結びつけたのである。

こうした話を紹介するのは、書き言葉による対話や学問のみが必要で、話し言葉による対話や学問が必要ないと言いたいからではない。そうではなく、書き言葉での対話や学問が果たしてきた役割、また、それらを収集・保存していた図書館は果たしてきた役割を忘れるべきではないのではないかとということが言いたいのである。読書離れが言われる中で話し言葉を用いたコミュニケーションの場を提供するようになってもお、図書館が書き言葉による対話や学問の場であり続けることの意義は小さくないことは歴史が教えてくれるのである。

ただ、“読書離れ”の状況ゆえに、書き言葉にこだわり続けることは図書館を衰退させてしまうという危惧がもたれるかもしれない。しかし、2017 年 1 月～2 月に全国 15,861 人の児童・生徒から回答を得た「子供の読書活動の推進等に関する調査研究」によると、小学生・中学生では、平日に読書をまったくしない児童・生徒は 1～2 割。約 5～6 割は 1 日に 30 分未満の読書をしているという。また、小学生では 1 か月に 5 冊以上読む児童が半数を超え、1 冊も読まない率は 1 割未満であった。つまり、小中学生では読書冊数は増えている。この読書冊数の上昇傾向の背景にあるのは「朝の読書活動」という。書き言葉にこだわる図書館の未来は意外に明るいのではないだろうか。

(1) 文化庁「平成 25 年度『国語に関する世論調査』の結果の概要」、
http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/h25_chosa_kekka.pdf、アクセス日：2019 年 9 月 2 日。

(2) イアン・F・マクニーリー／ライザ・ウルヴァートン（富永星訳、長谷川一解説）『知

はいかにして「再発明」されたか—アレクサンドリア図書館からインターネットまで』日経 BP 社、2010 年。

（3）平成 28 年度文部科学省委託調査「子供の読書活動の推進等に関する調査研究」報告書概要版、平成 29 年 3 月、<https://www.kodomo.go.jp/info/child/2017/2017-063.html>、アクセス日：2019 年 9 月 2 日。

電話ボックスから図書館に

リチャード・パウエル 教授
(英語セミナー)



南ロンドン



ゴゾ島 (マルタ)

日本人と同じように、イギリス人もほぼ全員が携帯を持っているので、公衆電話の必要性は次第になくなりつつありますが、ピンク色の公衆電話が恋しい日本人と同じように、伝統的な「red phone box」が完全になくなったら悲しいと感じるイギリス人がいます。残念ながらピンク電話の行き先は博物館の展示ぐらいしか考えられないのですが、電話機を 100 年前に **Sir Giles Gilbert Scott** という建築家が設計した赤いボックスから取り除いたらそのボックスには様々な用途があるでしょう。

20 年前は無線用の電気通信関係のボックスが登場し、携帯修理店も現れましたが、最近は電話と関係のない機能が多いです。夏休み中 2 週間かけてロンドン、ケンブリッジ、オックスフォードやブライトンを訪ねました。なんと田舎町の観光案内所、病院のない村の除細動機 (AED)、海岸沿いにあるサングラス販売店、ロンドン市内の ATM、カップケーキやコーヒー販売店として利用されているボックスを見ました。ボックスの順応性やそれらを利用する人間の想像力に感動させられましたが、或るボックスは特に印象的でした。それは南ロンドンで偶然に見つけた「**phone box library**」でした。誰でも本を置いたり、借りたりできる電話ボックスを利用した図書館です。





除細動機設備



カップケーキのキオスク

背景を調べたら、最初の phone box library は 2009 年に、移動式図書館の運行が停止されたサマーセット州の村で現れたようです。1960 年の公衆電話ピークの時、全国に 7 万個以上のボックスがありましたが、その 50 年後、ブリティッシュ・テレコム社が 9 割近くを回収したので、Westbury-sub-Mendip（人口：800 人）の村役場が電話機を取り除いた 1 箱を £1（約 130 円）で購入しました。村に設置されたボックスの棚に寄付された本を置いたら図書館になりました。その後ヨークシャー州を始め、他の田舎町にも次々現れました。ゴゾ島に住んでいる親戚によれば、英植民地であったマルタ共和国にも同じ形の phone box library が見られるという事です。

殆どの住民が知り合いである田舎では、信頼に基づいた無人図書館の成功が理解しやすいが、大都会で上手く運用できるかには疑問がありました。でも、南ロンドンのボックスを使う友人によれば、本が返されない場合もたまにはあるものの、殆どの利用者が本をちゃんと返すし、本を補う人々も多いし、書籍がなくなるというよりも増えすぎる心配があるそうです。

誰でも自由に入れる場所ですので、phone box library にはどんな図書が置いてあるのか興味がわきました。学生時代にはバス、列車やヒッチハイクで長い旅をしたものですが、荷物が重くならないように一冊だけを持ち運びそれを読みきったら、偶然会う旅人と交換する習慣でした。一生忘れない Hermann Hesse の「Siddhartha¹」や Albert Camus の「L'Etranger²」（幸いに両冊とも薄くて軽い）を含む様々な小説を様々な言語で読ませてもらう機会に恵まれましたが、本を交換する機会が少なくなり、旅が終わる直前、読み物の質にはあまりこだわらなくなりました。電話ボックス図書館で様々な本を見た時に旅先の乱読の思い出もありましたが、ぎっしり本が詰まった本棚には文学・哲学・歴史などのやや難しい図書も多くて、狭いスペースにしては書籍の多様性がある事に驚かされました。せっかくの機会なので、高価で買わなかった Roberto Bolaño の未解決連続殺人事件を取り上げる「2666³」を借りました。900 ページもある小説ですので、日本に帰る前に半分ぐらいしか読み切れませんでしたが、ボックスにちゃんと返却しました。次回ロンドンを訪ねた際に万一まだ置いてあればその後半を読むのを楽しみにしています。

- 1) ヘルマン・ヘッセ (1877-1962) 「シッダールタ」 (1922) (高橋 健二 翻訳、新潮文庫、1959)
- 2) アルベール・カミュ (1913-1960) 「異邦人」 (1942) (窪田啓作 翻訳、新潮文庫、1963)
- 3) ロベルト・ボラーニョ (1953-2003) 「2666」 (2003) (野谷文昭 翻訳、白水社、2012)

私のおすすめ本

櫻井 研司 准教授
(産業・組織心理学)

1. 『ポジティブ心理学の挑戦』 Martin E. P. Seligman (著) 宇野カオリ (監訳)

ディスカバー21、2014年

本書は、ポジティブ心理学を立ち上げたセリグマン博士が、この学問分野の意義や研究成果についてまとめたものです。ポジティブ心理学とは、“私たちが本当に幸せにしてくれるのは何だろうか”という問いを(真面目に)研究する学問です。ここで述べる「幸せ」とは、例えば欲しいものを買ったり、会社で出世することによって得る一過性の幸せではなく、より持続的で質の高い幸せのことです。

本書の流れとして、まずは「幸せ」という概念を明確にしつつ、いかに悲観的な態度と行動が、我々の心身に対して有害であるかを実証的な根拠をもとに説明されています。そして、ここからが本書の醍醐味と言えますが、幸せを感じやすい人とそうでない人には確かに遺伝的な違いがあるものの、「幸せ」を高めるうえでの重要なヒントを教えてください。さらに後半部分では、楽観的な態度と行動は、我々が考えているよりもずっと、健全な心と体を維持するうえで重要であることを実証研究に基づいて説明されています。

経済学部には所属する皆さんにとって、心理学は身近な学問ではないかもしれませんが。しかし、経済学という垣根を超えた広い視野から物事を考えさせるという意味で、価値のある一冊だと思います。実際セリグマン博士は、経済学者が定義する豊かさ・幸せに懐疑的な意見を述べておられますので、皆さんが学んできた事柄と比較しながら読むと面白いでしょう。また、このメッセージを読んでいるということは、何らかの巡りあわせかも知れませんので、ぜひ無料で読める在学中に読むことをお勧めします。

なお、もしも本書を読んでもっとこの学問を知りたいと思った学生の皆さんには、慶應義塾大学教授の前野さんが執筆された『実践ポジティブ心理学—幸せのサイエンス—』もお勧めします。

2. 『若者と労働』 濱口桂一郎 (著)

中央公論新社、2013 年

本書は、労働政策の観点から若者の雇用に関する諸問題と、それらに対する処方箋についてまとめたものです。

流れとしては、まず日本の就職システムの特徴を明確に述べ、それらが幾重にも折り重なって、若者の就労意識の低さや、雇い主に翻弄され続ける就業人生を多くの人々が送ることにつながっていると論じます。それらの処方箋としては、欧米型のジョブ型雇用 (i.e., 入社時に職務の範囲をあらかじめ決定する雇用契約) を取り入れることを勧めていますが、このことを達成するためには、やはり労働政策の専門家らしく日本の制度そのものの変革を提唱しています。特に大学教育に関する改革はショッキングな内容となっています。詳細については是非読んでほしいものですが、経済学部を含む文科系については手厳しい指摘が多くあります。

濱口さんの提案する処方箋に賛同するかはともかくとして、日本の多くの労働問題 (e.g., ニート、正社員と有期雇用労働者の待遇格差) の根底には、日本の就職システムが関与しているという視点は大変興味深く、また説得力があります。この本を読むことによって、より良い仕事につけたり、幸せな人生を送れたりするとは言えませんが、日本が抱える労働問題についての知見を確実に高めてくれる一冊ですので、ぜひ読んでみて下さい。

私のおすすめ本

杉原 茂 教授

(経済政策論)

高度成長の時代 香西泰

日本評論社 1981 年¹

本書は、著者が中央官庁の「調査マン、エコノミスト、あるいはスタティシャン²として、曲がりなりにも日本経済の動きをみつづけてきたこと」を頼りに「1945 年から[1980 年あたり]までの日本経済の歩みを回顧したものである。」

官庁エコノミスト³として鳴らし国民所得統計の黎明期に辣腕を振るった人にふさわしく、経済理論を駆使した統計を縦横に引用しているが、本書で触れて欲しいのは、経済を分析するときの姿勢、現実の事象に迫る時の眼差しといったものである。

著者は、この時期を回顧する際の視角として、「決断に際しての人間行動の記録（ヒューマン・ドキュメント）への関心」と「人々の文明における不易と流行との関係への興味」を挙げている。後者も非常に重要な視点であるが、ここでは、特に、前者について紹介したい。

経済理論は論理的な演繹体系であり、実証分析は因果関係を析出するものであるから、経済分析を行っていると、すべては必然に見えてくる。しかし、技術的・経済的に当然のごとく実現したと思われる事柄でも、果敢に行動する人間がいなければ実現することはなかった。「マクロ的にみれば投資の伸びは当然であるにしても、それが実現するには経済主体の面で異常ともいえる適応努力を要した。設備投資の伸び 20%を支えることは、資本財・生産財産業は大幅な生産拡張を図らなければならず、そのためには多くの労働力がこの分野に吸収されて、なれぬ手つきで新しい作業に従事しなければならなかった。」最後のくだりは人の心を打つものがある。形式的には産業間労働移動に伴う労働の不効用ということではあるが、経済現象の背後にある人間の感じ方と行動に対する深い眼差しがある⁴。

¹ 絶版。その後日本経済新聞社からも出ていたがこちらも絶版。

² 統計家 (statistician) のことであろう。

³ 今や死語になってしまった！

⁴ こうした視角は、マルク・ブロックが技術革新についての人々のとらえ方 (popular mentality) の影響を決定的に重視することと通底するものがある。すなわち、技術自体は人類の歴史の始めから存在したが、そうした古くからある技術が実際に使われるようになったのは、技術自体のメリットによるものではなく、国家の盛衰や宗教的信条、公的権威の新しい形

また、現場にいる人間にとっては、すべてが自明なわけではない。自らを取り巻く諸条件、問題の所在、解決方法とその効果、他の経済主体の反応など、見通しの効かない不確実性の中でぎりぎりの判断を迫られることになる。

例えば、1950年代前半の合理化投資は、その効果が非常に大きかった反面、合理化投資をためらわせる様々な不確実性があった。それは、「①市場が狭隘で新鋭設備の稼働率向上が望めないこと、②新鋭設備により排除された労働力が二重構造をもたらし、低賃金を武器に新鋭設備と対抗するとみられること、③合理化投資は機械輸入を増大させるだけで国内市場を拡大しないことなど」であった。それは「高度成長期のように『投資が投資をよぶ』全面的な近代化とは異っていた。しかしそれだけに、その合理化を担当した企業の企業家精神が高く評価されるべきであろう。」

「高度成長は池田内閣によって始められたものではない。それは既に事実として存在していた高度成長を、単に容認しただけにすぎない。しかしそれはそれでたいしたことであった。人間の独創といってもそれほどのはできない。・・・逆に現実への認識が立ちおくれたとき、いかに大きな代償が必要か[以下略]。」

こうした「ヒューマン・ドキュメント」に関連して、チャーチルの栗田中将評が思い出される⁵。チャーチルは言う。「[後付けで見ると成功目前であったレイテ湾突入作戦において栗田中将が作戦を途中で放棄した⁶理由は[確かに]不可解だ。[しかし、レイテへ接近するまでの3日間に]彼の艦隊の多くは[航空機の]爆撃を受け四散した[武蔵も撃沈された]。情報もなく、おとりの成否も米艦隊がどこにいるかも分からなかった。傍受した敵電報により[敵艦隊の動向を誤解した]。孤立し援護もなかった。・・・同じような困難を経験した者だけが彼の行動を判断することができる。」こうした意思決定者が置かれた状況に対する深い洞察力があつてこそ、チャーチルもあれだけの戦争指導を成し得たのであろう。

経済を分析する際も然りというべきだ。もちろん、あらゆる状況を追体験することなど不可能だが、経済のみならず、社会、文化・習俗、思想、芸術、技術的条件、物的環境、身体的状況、集団的心理など多様な局面から人々の行動を再構成して考えていくことが、経済分

態などが折り重なって実現したのである (Hughes, The Obstructed Path)。

⁵ Churchill, Triumph and Tragedy (The Second World War, vol.6) .

⁶ 第二次世界大戦のレイテ沖海戦において、日本海軍はフィリピンへの米軍の上陸を阻止するために、おとりによって米海軍を北方面へ誘い出し、その隙にレイテ湾へ突入する作戦を立てた。おとり作戦は成功したが、突入部隊を率いた栗田中将はレイテ湾前で反転して突入しなかった (戸高一成『海戦からみた日本の戦争』)。

析を真に説得力あるものにすることを本書は示していると思う。

著者の自己規定は、「同時代を見通す「高い地位の人」(ヘーゲル『歴史哲学』)であったことはなく、資料の発掘と批判について、専門の訓練を受けたこともない。文字通り「高がスタチスト」(森鷗外『百物語』)であったにとどまる」というものだ。しかし、「素人歴史家は楽天的である」(森鷗外『伊沢蘭軒』)こともあって本書を執筆したとしている。そうした立場であるが、あるいはそうした立場だからこそ、当時の風潮や役所の内実などを豊富に盛り込んで、決断に際しての人間行動を生き生きと描き出している。

Economic Possibilities of Our Grandchildren John Maynard Keynes

Macmillan 1931⁷

Essays in Persuasion の中の一編。論文集自体は喫緊の課題についての時論集であるが、'Economic Possibilities'は、遙か将来についてゆったりと思考を進め、厳密さは追求せずまた哲学的なものとなっていると著者は述べている。

著者の問題意識は、次のようなものである。「物質的欠乏や貧困などの『経済問題』」⁸が「現在の我々の精神的・物質的エネルギーを消尽している」が、こうした『経済問題』は「一時的で不必要な混乱である。」「我々が持っている資源と技術をうまく利用するための経済組織を作り出すことができれば、・・・『経済問題』はもはや重要なものではなくなり」、「我々にとっての真の問題、すなわち人生と人間関係、創造と行為、宗教の問題が心と頭脳の領域を覆う(あるいは再び覆う)ような日が遠くない」将来に訪れる。

ケインズはブルームズベリー・クラブに所属していたので、哲学的・耽美的傾向を強く持っていたようだ⁹。私などは隠者的な考え方も好きなのだが、この'Economic Possibilities'については、時代を見る目を養うということを強調したい。

この文章が書かれた当時の状況は、「大恐慌と大量失業の中で、悲観論が世間を覆っていて、採るべき政策について間違った考えが跋扈している」というものであった。ケインズが

⁷ 邦訳(ケインズ『説得論集』)が東洋経済新報社(ケインズ全集第9巻)や日本経済新聞社から出ていたようであるが、現在は絶版。文中の引用は私が原著から適宜訳した。

⁸ 大文字の Economic Problems。なお、この『経済問題』に「階級間及び国家間の経済的闘争」が含まれているのは、当時のご時世と言うべきか。

⁹ こうしたことを含めて、Dostaler, Keynes and His Battlesなどを参照されると良いと思う。

求めているのは、事象の表面下で何が起きているかを見失わないこと、物事のトレンドを正しく認識することだ。

現下の経済状況は悲観的なものであっても、長期的には大きな経済的可能性が開けていると著者は見る。「記録が残る過去 2000 年の間、平均的な人の生活水準は大きくは変わらなかった。これは、技術が顕著に改善しなかったことと資本の蓄積に失敗したことによる¹⁰。」「16 世紀以降、複利の原理により、資本は想像を絶するほど増加した。技術革新も、科学と技術発明の偉大な時代である 18 世紀以降怒涛の勢いで生じている。」「これらの結果、人口の大幅な増加にもかかわらず生活水準は 4 倍になった。今後、人口はあまり急激には増加しないであろうし、技術革新も過去例をみないほど加速している。」

ややこじつけかもしれないが、ここでケインズはマルサスの冴的な状況とそれからの脱却を想定しているとみることもできる¹¹。マルサスの冴とは、生産力が増加しても人口が大きく増加するので一人当たりの生活水準が上昇しないという現象だが、ケインズは、今後は、資本蓄積と技術革新による生産力の増加、その一方における人口増加の鈍化により、一人当たりの生活水準が大幅に向上するとみているわけである。

ここで感じとって欲しいのは、ケインズの時代を見る目だ。これは、現在の日本は長期的に低迷して悲観論も強いが ICT 技術や AI の発展などで長期的には高度に発展していく可能性があることを見落とすなどということを行っているのではない。逆の状況として、仮に高成長の中にあっても、それはあだ花に過ぎないと反省することもできる。資本蓄積の黄金律というものがある。人々の幸せ（効用）を最大化する経済成長のあり方を示す定理だ。ばかみたいに投資して過剰に資本を蓄積しても、生産や経済成長率は高まり一見経済は繁栄し人々は浮かれているが、それは目的とするものを最大にする最適な経済成長ではない。ケインズは、ルイス・キャロルの'Sylvie and Bruno'の教授を引き合いに出して富の蓄積が自己目的化する愚かさを指摘し、価値を手段の上位に置き、善を有益なものよりも尊重することを主張している。ただ、これについても、ケインズのブルームズベリ的な価値観を皆が受け入れるべきだと言いたいわけではない。現下の悲観的状況に目を眩まされて目先の

¹⁰ 近代の始めに存在していた重要な技術は、歴史の黎明期に既にあったとケインズは指摘している。なお、人類の生活水準の変遷とそれに伴う技術革新については Ian Morris, *Why the West Rules, for Now?*を是非参照されたい。

¹¹ 人口の増加にもかかわらず生活水準が 4 倍に上昇したと指摘しているのだから、実際にはマルサスの冴にあったとみているわけではないが、そのメカニズムを念頭に置いていたという意味で。

泥沼からの脱出だけに狂奔するのではなく、底流する長期的なトレンドを見据えてどのような経済・社会を構築していくかを構想することは大変重要なことであるということだ。

来るべき経済・社会の構想をするというのは簡単にできる話でもないので、まずは、その前提となる潮流の変化を見極める目を養って欲しい。ケインズの時代、1930年代の大恐慌ということもあったであろうが、当時の人々の意識がマルサスの世界から抜け出すことができていなかったのではないか。確かに、既に19世紀には産業革命による生産力の飛躍的増大は現実のものと感じられていたであろうし、1920年代は大変な繁栄の時代であった（「狂瀾怒濤の20年代」という言葉さえある）。しかし、それが本当に長期に持続した場合の経済の姿を思い描くことは容易でなかっただろう。

ケインズは、想像力を羽ばたかせて、100年後に期待できる経済生活のレベルとそこで実現する経済・社会はどのようなものかを考える。「[ケインズの時代から]100年後に生活水準が8倍になることは十分あり得ることであるが¹²、・・・その時、経済問題はほぼ解決しているであろう。」[そうした豊かな社会の]経験を積むにつれて、新たに得られた豊富な自然の贈り物を」より良く使えるようになるであろう。

「我々は進化の過程において、経済問題を解決するような本能を発展させてきた」が、「人類史上初めて切迫した経済的必要性から解放される。」ただ、「かなりの期間はいくばくかの労働をすることは人生の満足にとって必須となるだろう」が、それは一日3時間もしくは週15時間の労働にとどまる。

そして、最後に、経済的可能性が開花することにより極めて大きな社会組織・制度の変革が可能になることが指摘される。「富の蓄積がもはや社会的に重要でなくなった時、倫理規範が大きく変わるであろう。」「富の分配と経済的報酬に関する社会的・経済的慣行は、それがどんなに忌わしく不正なものであっても、資本蓄積に有益ということで正当化されてきた。それをいまや捨て去ることができるのだ¹³。」心が揺さぶられるような文章だ。経済政策かくあるべしということを考える一助として、是非読んでいただきたい¹⁴。

¹² ケインズは、持続的成長の効果を複利計算によって例示する。「(資本ストックが) 毎年2%増加すれば、20年で50%増、100年で7.5倍になる。」

¹³ 余談だが、生産力が増加した結果、本来的に価値のある活動に従事できるようになるという発想は、マルクスの、高度な生産力を革命により奪取して「能力に応じて働き必要に応じて与える」というユートピアを実現させようという考え方と共通するものを感じる。あるいは、孔子の「衣食足りて礼節を知る」か。

¹⁴ なお、ケインズの予言が成就しなかった理由を当代一流の経済学者達が論じた論文集として Pecchi and Piga, eds., *Revisiting Keynes* があるので、興味がある人は参照されたい。

本書は 20 世紀最大の歴史学者の一人マルク・ブロックの主著であり、歴史学を大きく変えたアナール学派の代表的な名著と言えよう。

ただ、この本をピンポイントで推薦するというよりは、経済学の勉強をする上で、多様な分野の多様なアプローチを知ることが有益であるということの例として挙げたい。他に様々な本があるが、それらは最後に列記するとして、この本が出版 80 周年ということで代表選手とする。

本書から感じ取ってもらいたい最初の点は、社会を理解するには、制度の形式的な分析ではなく、自然環境や経済・技術的状況、人々の意識や心の持ち方（心性：mentalit）など様々な側面を生き生きと理解することが必要だということである。「社会を統御する制度の枠組みは、結局、人々を取り巻く環境を全体として知ることによってのみ理解することができる。」これは人々の生活の条件と心の状況をそれらの相互作用の中で理解するということであり、前者は物質的・経済的条件、後者は人々の感じ方・考え方のことである。一つ、印象的な文章を引用しよう。「あらゆる社会生活の背後に原初的なものの深淵が存在し、人々は制御し得ない力に蹂躪され、自然界では、明暗の対比のような性質間の二項対立は強烈で容赦のないものであった。...そうしたことが彼らの粗暴さに影響しなかったと考えられるだろうか。」

多様な側面の相互作用を分析することから、ブロックは、様々な学問分野の研究方法を援用する。次に感じ取ってもらいたいのは、こうした学際的アプローチである¹⁶。ブロックは心性すなわち人々の心のありようを追求したので、心理学的側面を重視したのは確かであるが、実は、集合的記憶のような集団的な観点を重視した社会学的分析であり、これは偉大な社会学者デュルケームの影響であるという（Hughes）。

¹⁵ 翻訳（ブロック『封建社会』）はみすず書房（2分冊）と岩波書店から出ているが、岩波版は絶版、みすず版も第一分冊は品切れとなっているため、原著を挙げさせてもらおう。私が学生時代に購入したみすず版は就職時に処分し、就職後に購入した岩波版も差し当たり参照できる状況ではないので、文中の日本語訳は、手許にある原著を素人の私が適宜訳した。ちょっと踏み込み過ぎた訳になっているところもあることは、ご容赦いただきたい。

¹⁶ Hughes, *The Obstructed Path*. 以下、ブロックの学際的アプローチについては多くを同書に依拠している。翻訳（『大変貌』）もあるが、現在は絶版。

また、地理学的観点も基本的な役割を果たしている。例えば、農業の生産性が低かったので十分な土地を確保するために集住地は離れて存在していたが、集住地内では盛期中世における無秩序による安全上の問題から固まって住んでいたとか、「耕作地は荒野を一時的に征服したに過ぎず、自然は絶え間なく耕地を荒野に戻そうとしていた」などの指摘は興味深い。さらに、語源学的アプローチも縦横に駆使した。例えば、'prudhomme'という言葉の意味の変遷を手掛かりにして騎士が社会的存在から法的存在へ変化していった様を解明した部分は大変見事なものである。なお、ブロックは、『ロランの歌』のような武勲詩などそれまで顧みられていなかった非伝統的な資料を活用したことでも知られる。

もともとブロックは経済史の専門家とみられていたとのことだ。そして、例えば技術革新が広く普及するには、技術についての人々のとらえ方 (popular mentality) の影響が決定的に重要であったとしている (Hughes)。

本書で感じとって欲しい第三の点は、物質的・精神的状況を生き生きと理解することは実際にはどのようなことかということである。ブロックの場合、生き生きとした理解は巧みな語り口に体现される。ブロックのやり方が唯一の方法というわけではないが、ブロックの語り口を味わってその深い洞察に思いを馳せて欲しい。ブロックは、特に、情感を喚起する語り口が巧みである (時としてメルヘンチックだ)。「獐猛な野獣というものは、[私たちにとっては、幼いころ]子守りのねえやばあやが語り聞かせてくれたお話の中にだけ現れるものであるが、[当時は]熊や特に狼が、あらゆる人けのない場所に、そして耕作された平原にすらも、うろついていた。」異界の恐怖がリアルな実感として迫ってくる。それを感じてこそ、立ちすくむ人々の心のあり方と行動が理解できるのではないだろうか。

人々の時間意識についても絶妙の語りが人々の行動原理や社会組織についての考察へと誘う。「成人の平均的な寿命は短く」、また、「老年期は非常に早く訪れたようだ。現代の中年以降は老年であった。」「この世界はものすごく古い (年取った) ものであると信じられていたが、実は若者によって支配されてきたのである。」こうした時間感覚を持つ人々は、何を頼りにどのように社会を組織・制御したのだろうか¹⁷。どうでも良い些細な事だと感じられるかもしれない。しかし、レヴィ=ストロースは「地球は人類なくして始まり、人類なくして終わるであろう」と言った (『悲しき熱帯』) が、彼が文化相対論に立って西欧中心主義を打破しようとしたことに、こうした時間感覚が関係したのではなかろうか。

¹⁷ ちなみに、現代の我々は、138 億年の宇宙 (あるいは 46 億年の地球) の中で 70 年から 80 年の健康寿命を持っている。

学者への興味は、その著作の内容もさることながら、人柄の魅力に惹き付けられてということが多いのではないか。ブロックの伝記は、その人物像に人気がある割に少ないが、既出の Hughes にある略伝に加えて、Fink, Marc Bloch: A Life in History はブロックの社会的・政治的状況や人間性及び学界での立ち位置などを（負の側面を含めて）生き生きと伝えてくれる。一人の誠実な人の生き様と学問への姿勢の記録として、読んで感じるころは多いと思う。

最後に、興味が歴史以外の分野にある人のために、経済を分析する上で参考となる視点を提供してくれると思われる他分野の書物をいくつか挙げよう。各分野の潮流は激しく遷り変わるが、あえて古典的な書物を挙げる。

社会の制度や構造に対する興味深いアプローチとして、ルーマン『法社会学』（法による社会統制のシステム論的分析）、ウェーバー『支配の社会学』（理念型）や「新秩序ドイツの議会と政治」（『政治論集 2』所収）、Habermas, Strukturwandel der Öffentlichkeit（市民（ブルジョア）的公共性概念の歴史的生成を、社会学、経済学、法学、政治学、社会史、知の歴史などの学際的アプローチにより分析：邦訳はハーバーマス『公共性の構造転換』）。

生物学特に進化生物学は、対象の性質からして、人間社会の分析に有益な手掛かりを与えてくれるだろう。ドーキンズ『利己的な遺伝子』（The Selfish Gene：利己的な遺伝子が自己の生存のために生物体を最適に制御するという「見えざる手」を思わせる見方：私が学生時代に読んだ時は『生物=生存機械論』というある意味で親切的な、今となっては残念な題名を付けられていた）、Richerson and Boyd, Not by Genes Alone（人類進化における文化の役割）、Bowles and Gintis, A Cooperative Species（人間の互酬性の進化：邦訳はボウルズ・ギンタス『協力する種』）、Gould, Eight Little Piggies（平衡断続移動説：邦訳はグールド『八匹の子豚』絶版）、Raup, Extinction: Bad Genes or Bad Luck?（生物進化における成功と失敗には、遺伝子の優劣だけでなく、偶然が大きな影響を与える：邦訳はラウプ『大絶滅』）、コンウェイ『カンブリア紀の怪物たち』（The Cambrian explosion!：原著は The Crucibles of Creation）、Lane, Life Ascending（副題：生物進化の 10 大発明：邦訳はレーン『生命の跳躍』）。

脳神経科学や心理学、哲学などからも得られる示唆は多いであろう。LeDoux, Synaptic Self（脳神経の物理的メカニズムが人間存在のあり方を決める）、Kahneman, Thinking, Slow and Fast（人間の思考のあり方の心理学的分析：邦訳はカーネマン『ファスト&スロ

一』)、Simon, *Administrative Behavior* (限定合理性及び満足化原理: 邦訳はサイモン『経営行動』)、Deleuze et Guattari, *Mille plateaux* (モナド及びリゾーム: 邦訳はドゥルーズ・ガタリ『千のプラトー』)。

レヴィ=ストロースは神話の構造を分析する際に A. ヴェイユなどの数学者の助けを借りて群論 (あるいは **Category theory**) を使ったが (『構造人類学』)、数学の論理構造を経済や社会の分析に使う可能性は大きいと思われる。同著者では他に *La pense sauvage* (『野生の思考』: ブリコラージュ)。

読書について

常木 淳 教授

(財政学、公共経済学)

研究者という商売柄、本との付き合いは長い。もちろん、そのプロセスでは、図書館とも大変お世話になり、多くの関係者の方々から便宜を図っていただいていた。しかし、ここでは自分の直接の読書体験ではなく、全ての意味でおそろしく対照的な二人の「天才」による、一見したところまさに対照的な読書術を紹介することにしたい。

一人目の天才は、19 世紀ドイツの偉大な哲学者、アルトゥール・ショウペンハウエルである。この稀代の厭世家の手にかかると、読書という無条件に立派に見える行為もまた、彼の苛烈な批判の刃から逃れることはできない。彼の読書論は、以下のように始まる。「もともとただ自分のいづく基本的思想にのみ真理と生命が宿る。…書物から読みとった他人の思想は、他人の食べ残し、他人の脱ぎ捨てた古着に過ぎない。」「精神が代用品になれて…自らの思索の道から遠ざかるのを防ぐためには、多読を慎むべきである。」「(ショウペンハウエル (斎藤忍随訳)「読書について」、岩波文庫)「若いうちにたくさんの本を読んで、しっかり勉強して、立派な大人になりなさい」などという校長先生の朝礼に出てきそうなお説教など形無しである。

さて、ショウペンハウエルとはあらゆる意味で対照的なもう一人の天才が、20 世紀日本の高度成長期に小学校卒の学歴で総理大臣にまで上り詰めた政治家、田中角栄である。残念なことに、最近、大阪から引っ越してした筆者は、角栄の秘書として彼に仕え支えてきた早坂茂三氏の手になる角栄の評伝を引っ越し荷物の中に埋もれさせてしまい、どうしても見つけることができないのであるが、その中には角栄の卓抜な読書術が記されていたと記憶する。彼は、何か調べたいとか勉強したいとかいうことがあると、早坂氏に命じて「これこれに関する本を何貫目ほど買ってこい」と言ったそうである。つまり、本の題名も作者の名前もない、本の価値を魚や金属の如く重さで測るのである。おそらく重要な問題になるほど、貫目は重くなっていったことであろう。

一見すると、ショウペンハウエルと角栄は正反対のことを言っている。片や人間社会の愚劣にとことん愛想をつかして、孤高の思索に人生の慰めを見出した哲学者、対するは、人間社会の汚辱の只中に己の運命を引き受けて権力の頂点を極めた政治家となれば、対立

するのは当たり前である。だが、筆者には、この二人の読書術の対照性よりも共通性の方が、より強く感じられてならない。

両者の読書術の共通性は、ともに、書物それ自体に対して、著者の名称、地位なども含めて一切の権威を認めていないことである。漫然たる読書、あるいは他人に知識をひけらかすための読書などくそくらえと言っているのだ。早坂氏の著書によれば、角栄は「政治の本質は常識である」と語り、彼が最も嫌ったのは空理空論であったという。これと対応するショウペンハウエルの言葉を拾うならば、「学者とは書物を読破した人、思想家、天才とは人類の蒙をひらき、その前進を促す者で、世界という書物を直接読破した人のことである。」（同前）ということになるのか。

読書は、あくまでも自分が知らないことを勉強して、自分のためになる知識を身につけるために存在する。そのために読む本を徹底的に厳選するか、逆に貫目で買って乱読するかは人次第、課題次第である。だが、どう転んでも、読書は、それによって本当に自分のものになったと思えるような何かを身につけて初めて意味がある。そこをわからないと、安易なハウツー本に踊らされたり、いい加減な宗教やカウンセリングの本を盲信する破目にもなる。その意味で、この二人の天才の読書術は、我々現代人にとって大切な教訓を含んでいるように思われるのである。

私のおすすめ本

常木 淳 教授
(財政学、公共経済学)

デミアン ヘルマン・ヘッセ (高橋健二訳)
新潮社 (新潮文庫) 1951 年

およそ本というものは、若い頃に読んだ方が良い本と、そうでないものがある。例えば、漱石の草枕とか鷗外の史伝物などは、普通の高中生や大学生が読んでも、あまり面白いものではないのではないだろうか。ヘッセの小説は、青春の文学者たる彼にふさわしく、高校・大学時代に読むにまことにふさわしいものではないかと思う。特に、「デミアン」は若い頃に読んで学ぶところが大きいであろう。今風のいじめ問題から始まる本書は、主人公のエミールをいじめっ子から救ってくれた友人のデミアンに対して、どうやっていじめっ子を退治したのかを尋ねるところから始まる。デミアンは、いじめへの簡潔な対処法をエミールに伝えるが、エミールにはその意味を理解できない。そして、それからエミールの自己形成のためのたゆまぬ努力の過程が描かれ、彼がかつてデミアンの語った答えの本当の意味にたどりついた時に、エミールの青春の物語は完結する。人間が真に一人の大人になってゆくとはどういうことなのか、ヘッセ自身の過酷な精神的体験との闘いを踏まえて書かれた本書には、そのための、汲めども尽きない多くの大切なヒントが隠されている。

学問のすすめ (現代語訳) 福澤諭吉 (斎藤孝訳)
ちくま書房 (ちくま新書) 2009 年

福澤諭吉は、近代日本が生んだ最も偉大な思想家である。「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」という人口に膾炙した一文から始まる本書は、全ての人間が平等な権利を持つとする文明社会の理念が、全ての人間それぞれ個人として独立しなくてはならないという厳しい義務の存在を前提としてのみ成立していることを指摘し、人間として独立するためにどのような学問をどのように学ばなくてはならないのかを伝えることを目的としている。福澤の議論は、そこからさらに広がりを見せ、そもそもなぜ人間は個人として独

立しなくてはならないのかを説いて、人間の自由と社会的義務との関係、個人と政府の関係、国際社会における国家の意味と国民としての責任などの問題へと深まってゆく。その一方で、どのようにして品格ある人間となるか、適切に人生設計をする秘訣、理論と実践とのバランス、円満な対人関係の形成など、ハウツー本的なトピックも満載で、そのいずれもが良く考え抜かれて軽薄に流れるところなどみじんもない。本来、彼一流の名文を原書で読むのが最も望ましいが、文語体に慣れない読者の方は、まずは現代語訳された本書で福澤思想の神髄を学ぶ第一歩としてほしい。

私の幸福論 福田恆存

ちくま書房（ちくま文庫）1998 年

戦後日本に屹立する孤高の大思想家、福田恆存の幸福論である。女性誌に連載されたものであるが、福田氏自身が断っているように、女性限定の幸福論ではない。ただ、美醜（ルックス）の問題から入るのは、やはり女性誌の読者層への配慮からだろうか。そして、女性に限らずすべての人に美醜の差があり、それによって生涯の幸不幸が左右されるのは避けがたい真実である、という、誰もがうすうす感じていながら、建前上、口に出さない論点を正面から提示して議論に入る。そこだけを一読すると、筆者も含めて強く反発を感じるところではあるが、福田氏の本意は、事実としてあるものをないかのように目を逸らし心にふたをしている限り、本当の幸福はない、というところにある。事実を事実として認めて、とらわれずに率直に振舞うところから、本当の自由、本来の幸福は生まれる。宿命と自由、真の教養といった極めて重い問題に対する深く周到な考察を経て、再び、愛、性、結婚、家庭など男女間の問題を論じたのちに到達する結論部を、尽きせぬ感動を持って受け止めて自らの一生の心の糧とするか、それとも、「なんだい、あれこれと理屈をこねた挙句、結局ただの気休めじゃあないか」と言って本を放り投げるかは、もはや読者それぞれが自ら選択すべきことであろう。福田氏自身が言っているように、「究極において、人間は孤独です。愛を口にし、ヒューマニズムを唱えても、誰かが自分に最後までつきあってくれるなどとは思ってはなりません。」

私のおすすめ本

小田 圭一郎 教授

(金融論)

若い時分に読んで、経済学の勉強には全く役立たなかったが、今から振り返ってみると読んで良かったと思われる本を3冊ばかり紹介する。

(1) 貨幣論 岩井克人

筑摩書房 1993 年

本書は、当時の学部学生にとってスター経済学者であった岩井先生によって書かれた「貨幣とは何か？」という抽象的な問いをめぐる抽象的な考察」であり、マルクスを「その可能性の中心」において読み直す試みでもある。本書は大きく以下の二つの論考に分けられる：(1)貨幣の存立構造についての考察(1-3 章)；(2)貨幣の本質が恐慌を経て危機（ハイパーインフレーション）をもたらす可能性についての考察(4-5 章）。経済学的には、前者はサーチ理論、後者は岩井先生独自の不均衡動学理論を背景としている。

今回、殆ど 20 年ぶりに再読し、幾つかの斬新な着想に改めて感銘を受けた。第一に、貨幣の存立構造を考えるにあたり、「労働価値論」を採用しないにもかかわらず、あえてマルクスの価値形態論を援用している意義である。経済学的にはサーチ理論で示せる主張を、「全体的な価値形態」と「一般的な価値形態」との無限の「循環論法」として説明することにより、「売り」と「買い」という二つの行為の分離を導き、経済不均衡へと議論を進めている。第二に、貨幣は商品として他の財と交換されるにもかかわらず、貨幣自体には市場が存在せず、従って、価格を通じた需給変化への対応ができない点である。この事実が、恐慌や危機につながっている。最後に、貨幣を通じて「買う」ことの本質的な困難がハイパーインフレーションを引き起こすという指摘である。これは銀行理論における銀行取付モデルと理論的類似性があり、この観点からは、「信用」ないし「信認」という概念を通じて本書の議論に拡張の余地があり得ることを感じた。

本書出版以来、二度の金融危機や電子マネーや暗号通貨の発展という、従来の金融観を揺るがしかねない大きなイベントを経て、本書で論じられた貨幣に係る抽象的論考は、現前する具体的な課題として、その重要性を一層増している。

(2) 集合とはなにか -はじめて学ぶひとのために- 竹内外史

講談社ブルーバックス 1976 年

本書は、数学基礎論の世界的権威であった竹内先生により、「数学的訓練がなくても物を読んで考えることのできる大人」を念頭に書かれた啓蒙書である。しかし、それは本書が易しく読めることを全く意味しない；むしろ、読者に対して、前提知識は必要としないが、多大な知的努力を要求する本である。

最初の2章で、論理学とカントール流の「素朴集合論」が簡潔に記述された後、以降の章で、「公理的集合論」(ZF 公理系)とそれ後の集合論の展開について、著者独自の直観に基づく説明が、時に大胆な形で与えられる。本書を読むことにより、我々は、必ずしも数学的に厳密ではないが、信頼できる数学的直観を通じて、(1970 年代までの)先端の数学基礎論にアクセスすることが可能になる。

我々にとって、数学基礎論それ自体はおそらく趣味の領域に属する。しかし、そこで用いられる論理性や概念化のための徹底した抽象性に触れることは、いかなる職業人生においても、決して無駄にはならないことを確信する。

(3) 地獄の季節 ランボオ (小林秀雄訳)

岩波文庫 1970 年

Arthur Rimbaud の詩を小林秀雄の見事な誤訳！で読める至福。

「ライブラリー」への寄稿を依頼されたこともあって図書館を訪ねてみたところ、「いまどきの大学生」というポスターが張っており、その中に「でも、彼ら（筆者注：いまどきの大学生）は、意外にいろんな本を読んでいるし、」という一節がありました。「意外に」というところに少し引っ掛かりを感じますが、それはともかく、「いろんな本を読んでいる」のであれば、それはとても良いことだと思いますので、是非続けてほしいと思いますし、自分はその中には入らないと思う人がいれば、是非、これからいろんな本を読むようにしてほしいと思います。

自分の経験で言うと、幼いころから本を読むことが好きで暇を見つけては面白そうな本を探して、まさにいろんな本を読んでいた。分野的には歴史関係の本が好きでしたが、興味がわくようなものであればジャンルにはこだわらず、手当たり次第に読みふけていたような記憶があります。ただ、就職をして社会人になってからは、仕事が忙しいとか他にいろいろとやることが出てきてしまって本を読む時間はだんだんと少なくなってしまいました。更に、家庭を持つてからは、ご多分に漏れず、じっくり本を読む機会はますます少なくなってしまいました。もちろん社会人になれば社会人としての役割があり、結婚をして家庭を持てば、家庭人として果たすべき役割が生まれ、その結果として自分で自由に使える時間も少なくなるのは当然のことですが、現在になって振り返って思うと、もっと本を読む時間を作りたいかっただと思います。特に学生の頃にはいろいろな本をもっと読んでおきたかったと強く思います。

その理由の一つは、学生の頃はとにかく時間があるからです。このように書くと、学生の皆さんの中には、学生だって忙しいと思う人がいることと思います。確かに、大学の授業の予習や復習、課題などをこなさないといけないし、就職や資格試験に備えての準備などもあるでしょう。それ以外にも、部活動やサークル活動に打ち込んだりすることも、バイトや友達との付き合いなども学生生活に欠かせない重要なことだと思います。ただ、そういう中でも時間は作れるものですし、社会人になった後よりも学生時代のほうが時間を見つけやすいと思います。そして第二の理由ですが、何事にも「旬がある」と思うからです。「旬がある」とはものごとを行うには行うにふさわしい時期があるということで、本を読むにも、旬というものがあると思います。子供の時に読んで感動した小説を後になって読み返したと

きに、子供の時に受けたのと同じような感動を感じなかったという経験をしたことはありませんか。それは一度読んだことがあるため、読み返したときには新鮮味が失われてしまったためかもしれません。しかし、私の思い込みかもしれませんが、仮に初めて読む場合であったとしても、子供の時に読んだのと同じような感動が得られない場合が多いのではないかという気がします。それは本、特に小説には、それを読むのに一番ふさわしい人生の時期があるからのような気がします。そして、多くの場合、二十代前後、皆さんの年代がそれに該当するような気がします。年齢を経ていろいろな経験を積んだり、知識が付いたりすると、かえって本、小説を読んでも純粋に感動ができない、そういう風になりがちです。人生は長いから、この先本を読む機会はいつでもあると考えるのではなく、現在がその時だと思って、興味の赴くまま、本をたくさん読んでください。きっと皆さんの人生を豊かなものにしてくれると思います。

一サラリーマンにとっての本と図書館

中垣内 隆久 教授
(地方財政論)

もともとは公務員だが、4月から本学部にお世話になっている。その前は、北の大地、北海道は札幌市役所に出向していた。札幌には1000日と少しお世話になった。その間、本も1000冊以上増えた。ついでに言えば、安ワイン(@500円)も嫁と二人で1000本くらい空けた。

本を買いだめする癖がついたのは渡部昇一「知的生活の方法」のせいである。読書が知的生産の質と量を左右するというテーゼを「本を買いさえすれば賢くなる」と勝手に勘違いし、せっせと本を買い増した。

学生時代には立花隆のネコビルに圧倒され、「連載を始める前にトラック1杯分(3杯だったかもしれない)の資料を集める」という司馬遼太郎のエピソードに憧れた。社会人になり、1~2年サイクルでの異動と転勤が繰り返される。特に専門といえる畑をもっていない私は、縁もゆかりもない行政分野に放り込まれた。法制、消防、税、IT、行政評価、行革、組織編成、総合計画、金融、予算、入札契約……。毎回の異動のたびに笑ってしまうくらいゼロからのスタート。

五里霧中でも周りは容赦してくれない。ハタハリをかませるくらいの知識は一日も早くマスターしないとイケない。民間でその状況に近いのは経営コンサルタントだろう。コンサルタントのノウハウ本にあったのは「新しく担当する業界に関連する本をとにかく買え。10万円分も買えば格好はつく。金を惜しむな。インターネット上の無料情報はそれだけの価値しかないことが多い。」ということ。この間、amazonを知ってしまったのもよくなかった。断捨離好きの嫁の形相は見ぬふりをして本を買うペースに拍車がかかった。

札幌に来てからは、関心の対象に事欠かなかった。札幌や北海道の歴史を知りたければ、北海道新聞データベース、北海道開発局〇年史や札幌市史は当然として、さっぽろ文庫、中央図書館の郷土資料コーナーの蔵書、財界さっぽろの別冊、北海道新聞社の単行本を夢中で漁った。

経済の特定業種が気になったら、まずは業種別審査事典。融資担当の銀行マン向けのこの事典は各業種の経営環境や収益構造などを分かりやすく解説してくれる。これは貸出禁止なので図書館で著作権法違反にならないギリギリの範囲までコピーをとらせてもらった。

自宅の隣が市立図書館（札幌市中央図書館）という立地を存分に享受し、とにかく図書館のお世話になった。本当にお世話になった。本を借りるのはもちろんのこと、気になるテーマがあるつど、「観光について」「就労支援について」「空港民営化について」「建設業の経営について」「オリパラについて」矢継ぎ早にレファレンスコーナーにメールで問い合わせた。いい本や雑誌記事があれば教えてくださいと質問した。

だいたい1週間程度で詳細極まりない調査結果をいただける。「図書館員は市民の有能な知的スタッフである」というのは心底からの私の実感である。あまりに照会頻度が高いせいか「中垣内」という名字はヘビーユーザーとして図書館の職員さんの間で少しは知られていたそうだ。素直に喜んでよいのかどうか。

私が本学部にお世話になって感謝していることの最大の一つは、大学図書館を使えること。本が本を紹介してくれるのが本の良いところだ。誘導されるままに本に取り組んでいると、いつか、知りたいことの全容が頭の中でつながる瞬間がある。つるはしのひと撃でトンネルが開通するかのような、スコープのひと堀で山芋の一つながりがずるっと掘り出されるような、そんな感じ。大学図書館では、膨大なデジタルコンテンツも使い放題。どんな分野でも、ひとかどの人物になるには1万時間の蓄積が必要という説がある。学生の皆さんのアドバンテージは、まとまった膨大な時間が自由になるということ。ぜひ、大学図書館を使い倒し、多くの知的刺激を脳に与えてください。

中垣内 隆久 教授
(地方財政論)

うらおもて人生録 色川武大

新潮社 2014 年

かつて将棋に夢中になっていたこともあり、ぼつぼつと勝負のノウハウ本を買い集めている。将棋は手の内が明らかなので技術の優劣が勝負を分ける。不完全情報ゲームの麻雀はそうではないはず。運が勝負を左右する。なのに麻雀にも絶対的強者がいる。それが不思議だった。

その一人が「雀聖」と言われる阿佐田哲也。映画化もされた名著「麻雀放浪記」の著者であるが、この人の本名を色川武大という。

中学中退で博打の世界に身を投じ、二十歳過ぎに足を洗って出版社勤めというカタギの世界に。2つの世界で人間模様をじっと観察してきた人である。麻雀かチンチロリンか、昨日まで大勝ちして高笑いしていた人が今日は身ぐるみ剥がれ去っていく。そんな毎日を何とかしのぎ切った人である。

彼は言う。15勝0敗の人間を0勝15敗にするのはたやすい、勝ち続けるのは9勝6敗、8勝7敗を目標にしている奴だと。何かを得ると何かを失う。無理勝ちはフォームの崩れを招く。

そしてカタギの経験をあわせてこうも言う。

ヤクザの世界でもこうだ。ましてや、持ちつ持たれつの一般社会では相手に白星を贈るくらいでちょうどいい。全勝を狙うなどあり得ない。9勝6敗を続けるためには、ズルくてはだめ。その上に勤勉・才気。これがベース。これで小さな勝が狙える。

大勝ちするためには、頭をかきながら相手に白星を贈れる度量。これを言い換えると人間に対する愛情。これがないとスケール勝ちができない。そうなると、勝つための技術論ではなく、自分の人格や情緒をどう育てるか、という問題にどうしても行き着いてしまう。

「男はつらいよ」の車寅次郎のように、たまの正月、ワルいおじさんが遊びに来、一杯やりながらポツリポツリと独り言のように、コタツの向こうの自分に聞かせてくれる。そんな雰

困気である。世の中の光と闇の両方に通じた「劣等生」にしか書けない、味わい深い人生訓である。

「我れ百倍働けど悔いなし 昭和を駆け抜けた伝説の商社マン海部八郎」 仲俊二郎

栄光出版社 2011 年

ある政府系金融機関にいたことがある。仕事相手は証券会社や機関投資家という、多くの公務員にとって縁のない業種の人々である。資本主義のスーパースターである彼らから学んだことは本当に大きかった。ひと言でいうと、いかに人様のお心を頂戴するかという点である。立ち居振る舞い、言葉遣い、人間関係の作り方とメンテナンス。彼らは小手先のテクニクとしてそれらを実行するのではなく、心底から真心を尽くしているように見えた。

人間関係の機微に精通していることにかけては、商社マンも相当なものだろう。伝説の商社マンに日商岩井（現：双日）の海部八郎という男がいた。ダグラス・グラマン事件という政界を巻き込んだ航空機取引の汚職事件によって知られるが、「商売の極意は誠意しかない。」これが彼の信条だった。

日本の航空機市場が未熟だった昭和 30 年代ころ、ロッキード製の航空機を扱う代理店を日商岩井が引き受けていたが、三菱商事にその座を奪われかけた。巻き返しを命じられたのが海部である。

最後のサインがなされるまでには、まだ少し日数がある。そこに目を付けた海部はロッキード本社に日参する。責任者が会ってくれない中で日参を続ける海部に部下は「会ってくれないのに意味があるんですかね」とこぼす。海部は答える。責任者が会ってくれなくても、秘書からは『ミスター海部が来ました』と報告を受けるだろう。ということは、責任者の心に海部八郎の存在が 1 グラムだけ載ったことになる。明日は 2 グラム、明後日はもっと。それを続けることで、責任者の気持ちにも微妙な変化が生まれるだろう。商社マンの執念とともに、営業活動のキモを教えられたような気がした。

できる人・組織の共通点は人間関係の構築に関する強烈な関心であるように思う。私淑する元上司が「人間関係がうまくいってれば仕事の半分は成功したも同然」といつも言っていた。それを思い出させる本である。

「100歳の美しい脳 アルツハイマー病解明に手をさしのべた修道女たち」
デヴィッド・スノウドン著、藤井留美訳

DHC 2004 年

函館のトラピスチヌ修道院を観光すると決めたとき、修道女がなぜ高齢になっても元気ではつらつとしているか、この際少し勉強してみようと考えた。修道女だけではなく、仏教の僧侶もかくしゃくとした人が多いイメージがある。宗教者は健康寿命が長いのか、それはどうしてなのか。

掲題の図書の原題は「Aging with Grace」（「老いる、恩寵とともに」）という。賛美歌「Amazing Grace」をもじったものと思われる。著者のスノウドンはアルツハイマー病研究の第一人者の疫学者だそう。

アルツハイマー病にかかりにくい脳とはどういうものか。

修道女は、生活様式も同じ、所得水準も同じ、医療程度も住宅事情も同じなので、サンプルの間の比較がしやすい。スノウドンは彼女たちのキャリアパス、残された自伝（シスターは入所時、自伝を書くことになっている）、そして死後に献体された「脳」を分析し、謎の解明に挑む。

私なりにエッセンスを抜き出すとこういうことになった。

- ・すべてのシスターが健康なまま生涯を終えるわけではない。アルツハイマー病に侵されたシスターもいる。
- ・教育程度と健康には強い相関関係がある。学習期間が長いシスターほど、どの年齢に比べても死亡率が低い。教育には生命を守ってくれる効果がある。
- ・言葉が達者な人、語彙が豊富な人は認知能力が高度に発達し、神経細胞の接続が充実しているため、抵抗力の強い脳ができるのではないかと考えられる。
- ・「精神は身体とは別の暦で老いていくものらしい。100歳の高齢者に会うことが増えるにつれて、私はその確信を深めていった。」

肉体的にも精神的にも健康で幸福であり続けるためには、生涯学習を続けて知的に向上することがカギらしい。

本は他者との対話であり心の栄養である。

神保町に近いことは日大経済学部の大きなアドバンテージである。図書館や書店街を存分に利用していただき、みずみずしい、丈夫な脳を培っていただくことを願っている。

おすすめの本

野方 大輔 准教授
(ミクロ経済学)

戦略的コーポレートファイナンス 中野誠著

日経文庫 2016 年

企業には、ヒト、モノ、カネと三つの経営資源をうまく活用して、企業価値を最大化することが求められます。そのなかで、コーポレートファイナンスは、企業の「資金調達」、「投資」、「ペイアウト政策」という財務的意思決定を考える学問です。

本書は、財務的意思決定の全体像をつかむのに有用ですが、そのなかで読者をひきつけるいくつかの工夫がなされています。まず、登場人物の会話形式で話を進めることで、読者がファイナンスの話に無理なく入れるようになっているという点です。住宅メーカー社長と証券会社の社員のもつ素朴な疑問に一人の大学教師がゼミで答えていく、という形式で話は進みます。読んでいる側も、彼らとゼミに参加しているような気分になるので、彼らと同様に素朴な疑問をもち、もっと内容を深く勉強してみたいと思うことがあるかもしれません。このように本書は、ゼミでの会話形式から読者を引き込むことで、+αの勉強を促す仕組みになっているように思います。最後にはブックガイドもついていて、本を読み切った内容に興味を湧いた読者に向けて、さらにどんな本がおすすめかを丁寧に紹介してくれていますので、それを活用して自学自習するとよいと思います。

次に、データや論文の結果を豊富に用いて説明を行っており、論文執筆の参考にもなるという点です。たとえば、M&A をテーマに話をする際は、MARR や SPEEDA といったデータベースをもとに世界や日本の M&A の動向を紹介しています。また、企業の現金保有と企業価値をテーマに話をする際には、Dittmar 教授や Pinkowitz 教授らの学術論文の成果などをもとに話を進めています。これらは、読者が興味のある領域を深掘りする際に、どんなデータベースや学術論文にアクセスするのが適切かを検討する材料になろうかと思います。

そして、本書は、軽くて小さいサイズなので持ち運ぶのも苦ではありません。スマホだけでなく本書も常に携帯して、通学の移動時間などを活用して本書を読んでみてください。

新版 論文の教室 レポートから卒論まで 戸田山和久著

NHK ブックス 2012 年

みなさんは、文章を書く作業をこれまでにどれだけやってきたでしょうか。文章を書くことに苦手意識はないでしょうか。

大学に入学すると多くの授業で、しばしばレポートを書くことが要求されます。しかしど

う書いていいのかわからず、感想文同様の作文を提出した結果、低い点が付けられてしまうという苦い経験がある人は少なくないと思います。そのような人に、おすすめのレポート・論文の書き方の本を紹介するとすれば、本書をおすすめします。というのも、内容が充実しているだけでなく、読み物として面白く、飽きないからです。

本書では、論文がどんな文章なのかという「理論」と実際の論文の形の作り方「実践」がバランスよく配置されており、また随所に練習問題が盛り込まれているため、読み手が学習内容を適宜、確認しやすい作りとなっています。

また、先に紹介した本と同様、登場人物二人の会話形式でストーリーが進んでいきますので、読者が、論文の書き方を無理なく学習することができます。本書の主人公は作文の下手な大学生です。はじめは教師からこき下ろされてばかりの主人公の下手な文章も、教師（著者）からの適切な助言を通じて、章を追うごとに成長していきます。

文章を書くことに苦手意識をもつ人は、この主人公のことを他人事と思えないはずです。本書を読むことで論文の書き方を勉強して、主人公とともに成長し、よりクオリティの高いレポートや卒論の執筆に取り組んでください。

私のおすすめの本

横井 のり枝 准教授
(マーケティング論)

『思考の整理学』 外山 滋比古著

ちくま文庫 (ISBN-13: 978-4480020475) 1986 年

ネット時代になり、知識を得ることは容易になりました。しかし、それら知識を詰め込むだけではなく、それら知識をもとに思考し、それを整理し、そして思考を自分自身で表現していくことが重要です。

あまりにも有名になった本ですので、ここで詳細を述べるよりもまず、一度は読んでみることをおすすめします。

なお、本書はネット時代到来の前に書かれた本ですので、具体例が古い部分もありますが、思考の整理自体は普遍的ですので参考になると思います。

『マーケティング論の基礎』 現代マーケティング研究会編

同文館出版 (ISBN-13: 978-4495649616) 2019 年

マーケティングという言葉はよく聞くものの、実際のところはよくわからない学生も多いのではないのでしょうか。そんな学生にとって本書は、最適な入門書です。一方、マーケティングに興味はないものの、広告につられて商品を購入したり、商品に添付されているシールを集めて懸賞に応募したりすることはないのでしょうか。そんな学生にとっても、一読の価値があると思います。

みなさんの多くは、前から欲しかったもの、あるいは店頭で偶然みつけたものなど、新商品を手にしたことがあると思います。それらは、消費者である皆さんにとって「欲しい」と感じるから手にとって購入することになります。では、新商品とはどのようなものを指すのでしょうか。また、消費者に手にとってもらい、購入してもらえる新商品を開発するには、企業はどのようなことを考慮していかなければならないのでしょうか。本書では、企業側の視点から消費者にいかに商品を買ってもらおうとしているのかを知ることができます。

日頃、なにげなく手にとっている商品がどのようなコンセプトで開発され、どのような戦略で販売されているのかについて学んでみるのも、良いかもしれません。

『みんなの知らないロジスティクスの仕組み ―暮らしと経済を支える物流の知恵』

苦瀬博仁・岡村真理 著

白桃書房 2015 年

1 年で、あるいは 1 か月で何回くらい宅配便を利用しているでしょうか。配達に際して、時間指定をしていますか。ほとんどの場合、正確な時間と場所に、物資が届いているはずです。それは当たり前だと感じているでしょうか。その当たり前は、努力によって成し遂げられています。筆者はそれを、商品や物資の調達から生産、流通を経て消費に至るプロセスであるロジスティクスの極意と述べています。

日常生活を送る中では、宅配便だけではなくコンビニや商業施設など、さまざまな場面においてロジスティクスが関係しています。たとえば、コンビニで販売されるサンドウィッチは、パンと具材、そしてそれらを包むパッケージを加工してはじめて販売する商品としてのサンドウィッチになります。その加工過程にも、ロジスティクスは大きく関わります。また、大型の商業施設では多くの店がさまざまな商品を販売していますが、それら商品を施設に運ぶのは、ロジスティクスの役割になります。では、その商業施設が毎朝 10 時に開店する前までに、全店舗が需要する多数の商品を一度にひとつの商業施設に運ぶ場合を想像してみてください。周辺道路はどうなっているでしょうか？施設前に何十台、何百台のトラックを駐車させておくのでしょうか。それでは周辺を利用する一般の車両や通行者が困ってしまいます。それを解決し、施設に適切な時間に適切な商品を運んでいるのもロジスティクスです。

日頃、当たり前になりがちですが実は努力と知恵により、わたしたちの生活を支えるに至っているロジスティクスを学ぶこともまた、おすすめしたいです。

おすすめの本

岡島 慶 准教授
(英語)

(1) 『深夜特急 1－香港・マカオ』 沢木耕太郎 著

新潮文庫 1994 年

学生時代に打ち込んだことの一つに「一人旅」が挙げられる。若い時分に自分の目で色々な世界を見てみたい、と漠然と考えてアジアやヨーロッパの国々を貧乏旅行で回っていた。旅の帰結として何が得られたのかはいまだに分からないが、モノを見る感性がまだ新鮮であったうちに様々な事物に直接触れることが出来たのは、ひとつの財産なのであろう。

そんな私の旅行熱を高めてくれたのが、学生時代の愛読書のひとつ『深夜特急』シリーズである。本書は、著者のアジアからヨーロッパ最西端までの壮大な旅に基づく旅行記である。香港を出発点とする第一巻からポルトガルで旅を終える第六巻まで出版されている。気鋭のジャーナリストとして頭角を現していた 26 歳の沢木が、全ての仕事をキャンセルし、路線バスを乗り継いでアジアからロンドンを目指す。そもそもの旅程もなく、その日に泊まる宿も行き当たりばったりで、次にどの国に向かうかも気分次第。そんな自由で破天荒な旅が綴られる。旅の序盤、香港に滞在中の沢木はこう語る「今日一日、予定は一切なかった。せねばならぬ仕事もなければ、人に会う約束もない。すべてが自由だった。そのことは妙に手ごたえのない頼りなさを感じさせなくもなかったが、それ以上に、自分が縛られている何かから解き放たれていくという快感の方が強かった」(64)。沢木の自由な旅に、読者である私もなんだか身体が軽くなり、高揚感を覚えてくる。

本書のさらなる魅力の一つは、著者のみずみずしい視点であり、それを支える文章にあると思う。著者は、旅先で目にした様々な事象を率直に、ときにはユーモアを交えて描き、小さな心のふるえに敏感に反応する。年を取るにつれて、自分がすでに失ってしまった(かもしれない)心のときめきを思い出させてくれる良書である。

(2) 『ぼくらが漁師だったころ』 チゴズィエ・オビオマ著、栗飯原文子訳

早川書房 2017 年

本書は、ナイジェリア出身のチゴズィエ・オビオマ (Chigozie Obioma) の *The Fishermen* の邦訳である。2015 年に出版されるや同年のブッカー賞最終候補に選出されるなど、多くの賞を受賞し鮮烈な印象を残した本作は、作者のデビュー作である。

チゴズィエ・オビオマは、1986 年ナイジェリア南西部の都市アクレに生まれる。キプロスで大学教育を受け、その後アメリカへ移住しミシガン大学の創作コースを修めている。

現在はネブラサカ大学で教鞭を執りながら創作を続けている。20 世紀後半以降、アフリカに出自を持つ作家たちがさまざまに移動を繰り返しながら世界中に広がっており、「アフリカ文学」というカテゴリーが持つ定義や意義が多様化し、複雑化している。オビオマはこうした新世代のアフリカン・ディアスポラ作家の中でも最も若い作家の一人であり、新しい潮流の旗手とも言うべき作家である。

本書は、主人公ベンジャミン・アグウが 9 歳の頃の出来事を回想するかたちで語られる。舞台は 1990 年代のナイジェリアの都市アクレ。彼らの物語は、ベンジャミンと上の 3 人の兄たち（イケナ、ボジャ、オベンベ）の絆と愛、そしてその悲劇的な崩壊を中心に展開する。物語の前半は、近所の子たちとの喧嘩や、町を流れるオミ・アラ川での魚釣りの様子など、彼らの日々の暮らしが伸びやかに描かれている。しかし、住民から恐れられ、不浄の場とされるオミ・アラ川と関わりを持ってしまったことが彼らの運命を変えてしまう。ある日釣りの帰り道、「狂人」であり予言者でもあるアブルに遭遇する。アブルは、長男のイケナを名指しし、ある予言を残して去る。その予言とは、彼が兄弟の誰かに殺されるというものであった。イケナを中心に兄弟愛で結ばれていた固い絆は、この予言の重みに耐えきれず、徐々に崩壊し破滅的な最後を迎える。

翻訳は、原作が持つ言葉の鮮度と雰囲気を保ちながらも、美しい文章に仕上がっている。原作ではイボ語のみで表記されている箇所には、物語の流れを損なわない程度の日本語で解説が加えられており、読者の理解を深めてくれる工夫がなされている。

『ぼくらが漁師だったころ』は、読み物としての面白さもさることながら、アフリカやアメリカといった地域の垣根を超えて、21 世紀の文学の在り方に多様な示唆を与えてくれる貴重な一冊である。

図書館と学生時代

太田 瑞希子 専任講師

(EU 経済論)

学生時代、図書館で勉強ができなかった。勉強しようと勇んで図書館にこもっても、すぐに書棚と書棚の間を往復して背表紙を眺め手に取り読み始めてしまう。終わると別の階や地下書庫に行ってまた気になる本を手に取り、そしてすぐに帰宅時間になる。母校の図書館にはオープンなものから穴蔵のような隠された空間まで多様な勉強スペースが設けられ、どこかには誰かしら友人がいたので誘い合って休憩スペースでコーヒーを片手に雑談するのも日課だった。図書館で勉強できない自分を「意志が弱い」とも思ったが、図書館で知を得るという行為こそ本来のあり方であると途中から開き直った。

そう決めてから全体を探索すると、新聞だけ毎日読みに来る人、資格の勉強に専念する人、人の来ない死角にこもる人、見る度に違うジャンルの本を読んでいる人などそれぞれの図書館との付き合い方が見えてきた。毎日それぞれのパターンが繰り返されるゆったりした時間が図書館にはあった。

もう一つ忘れられない図書館がある。英国留学時代に通った大学図書館で「Old Library」と呼ばれたその建物は、中心を大きなホールが貫きその両側に天井まである書架が並び、間には4~5人程度が同時に勉強できる大きな机が設置されたヨーロッパの伝統的図書館スタイルだった。二階には回廊が張り巡らされ、やはり天井までの書架が並んでいた。回廊から一階を見下ろせば何かこの大学の学術の歴史に飲み込まれるような荘厳な空気さえ感じた。授業で指定された参考文献リストを片手に地下書庫に降りていくと廊下の両側に小部屋の分厚いドアが並び、そのいくつかの奥にはまた薄暗い廊下が続く迷路のような地下書庫では我々学生は「Murder in the Library」という言葉しか思い浮かない」と言いながらいかに早く資料を見つけて抜け出すかを競い、終わると一目散に地上に戻って「We survived.」と笑いあった。

思えば図書館があれだけ生活の一部だった日々は学生時代にしか存在しない。今では図書館で全く関係ないジャンルに手を伸ばす時間と精神的余裕はほとんど無くなったが、いずれ余裕ができれば日本大学経済学部の書架を制覇したいと目論んでいる。

私のおすすめ本

1. 『経済学大図鑑』 ナイアル・キシテイニーほか著、三省堂、2014 年

経済学の歴史や理論の変遷を豊富な図説とわかりやすい文章で解説した図鑑スタイルの経済学辞典。貨幣や財産権といった考えの発祥から始まり、産業革命と経済革命の時代、戦争と不況の時代、戦後を経て現代に至るまで、経済学に登場した理論や背景となる世界的事象が網羅されており、自分がいま学んでいるのは経済学の全体図の中でどこに位置するものなのかを把握することができる。履修選択やゼミ選択に迷った際にも参考にして欲しい。

2. 『中流社会を捨てた国 格差先進国イギリスの教訓』 ポリー・トインビー、デイヴィッド・ウォーカー著、東洋経済新報社、2009 年

世界各国におけるポピュリズムの高まりの背景には格差社会の拡大があることは広く指摘されてきたが、それが EU からの離脱という歴史的な動きとなって現れたのが Brexit である。この本では、過去数十年に渡る英国内の富裕層と貧困層それぞれの様相を描いている。富裕層にはますます富が集中する一方で貧困層は困窮を極める描写とその背景分析は、近い将来の日本の姿を想起させ危機感を掻き立てる。

本が好きだ。読むことはもちろん、集めることや、ズラリと並んだ背表紙を眺めることも好きだ。そのせいか、蔵書数は増えるばかり。将来が心配だ。そこで私は、工務店さんに依頼して、自宅のクローゼットを書庫に改造してもらった。さらに大学の研究室には、棚1段あたり 200Kg の重さに耐えうるという業務用専門棚を自腹で設置した。

蔵書が爆発的に増えたのは、神田神保町の古本街に足を運ぶようになってからだ。ちょうど西暦 2010 年の頃である。私は大学院を修了し、研究者として職を得たばかりだった。当時は文京区に住んでおり、勤め先は日本橋にあった。のんびりしていた私は、住まいから勤め先まで、徒歩で 1 時間かけて通っていた。東京ドームを抜けて「ニチケイ」本館の前まで来たら、白山通りをまっすぐ歩いて、神保町を通過していく。だが時々、靖国通り交差点あたりで、仕事に行きたくない気持ちに襲われる。そんなときはそのまま神保町にとどまり、古書店で時間をつぶすという塩梅だった。(仕事はさぼった。)

当時の私は、日本と中国の古典文学や歴史書に大いにハマっていた。「新日本古典文学大系」や「新釈漢文大系」といったシリーズの本が、神保町近辺の古書店では新刊価格の半値以下で売られていて、心は狂喜乱舞だった。「奇貨^お居くべし」とつぶやいては、ほかの様々なジャンルの本まで買い漁った。アルフレート・アインシュタインの『モーツァルト』や、ジョン・フォン・ノイマンの『自己増殖オートマトンの理論』といった稀少な絶版本も、このとき安く手に入れた。2 号館の向かいの「日本書房」でもよく買った。都内 R 大に務める経済学者の友人には、「安く買えて『消費者余剰』がっばり稼いだぜ!」と、得意満面によく伝えていた。そんなとき彼は決まって「どんだけ奇貨^お居いてんだよ!」と、あきれ顔で笑うのだった。(行動経済学ではこんな気持ちを「取引効用」と呼びます。)

仕事に関係のある本は、公費で買える。だが私は、たとえ公費で買える本でも、一所懸命に読みたいと思うものは自腹で買っている。故・渡部昇一先生も、ご自身の著書『知的生活の方法』(講談社現代新書)において、読書を食事に喩えたうえで、「身銭を切っておれば、まずいかうまいかについての判断もきびしくなろう」(p. 71)とおっしゃっている。蓋し名言。行動経済学でいう「心理^{メンタル}会計」を先取りしたご意見だ。

旅行に行くと必ず、その土地の書店に足を運ぶ。フィンランドでは、映画『かもめ食堂』にも登場した有名なアカデミア書店に行き、アルバ・アアルトの作品集を買った。アカデミ

ア書店は、日本のビル型大型書店と異なり、売場が2階までしかない。そのぶん店内が一望できる設計になっていて、たいへん美しい。日本の書店や図書館の設計には、こういう美的感覚が欠けているように思えてならない。台湾では、誠品書店に行った。TIME Asia 誌の「アジアで最も優れた書店」に選ばれたこともある有名店だ。そこで私は、ホンモノの中国古典を心ゆくまで物色した。そのときは、台湾商務印書館発行の『論語』と『晏子春秋』の注釈本を買った。もっとも、私は中国語が読めないのであるが・・・。

時代は令和になった。元号の由来が『万葉集』にあると話題になった。私は、かつて神保町の古書店で買った『万葉集』をスッと本棚から取り出し、サッと調べることができた。知識はいつ必要になるかわからない。本を買うことは、備えであると同時に、「すぐに」「正確な」情報にアクセスできる安心感を買うことでもある。たとえ読めなくても、堂々と買えばいい。いつかきっと役に立つ時が来るのだから。そう自分に言い聞かせながら、私は今もせっせと本の蒐集に励んでいる。

(1) フランス革命を生きた「テロリスト」―ルカルパンティエの生涯 遅塚忠躬著

NHK 出版 2011 年

本書は、日本におけるフランス革命史の大家である遅塚忠躬の遺作です。フランス革命といえば、ルイ 16 世、マリー＝アントワネット、ロベスピエール、ダントンなど個性的で、また小説や映画などで題材にされるような人物が登場します。しかし、本書の主人公はルカルパンティエという、日本ではほとんど馴染みの薄い革命家です。

農民の子として生まれたルカルパンティエは革命前には下級役人でしたが、革命が始まると、民衆の側に立つ政治家になっていきます。国民公会の議員に当選したあと、彼はロベスピエールと同じ山岳派に属し、ルイ 16 世の処遇を決める裁判で死刑に賛成票を投じました。山岳派による独裁が始まると、ルカルパンティエは革命を防衛するために、故郷のマンシュ県やその近隣に派遣されました。彼は同地域で王党派の反乱軍を撃退したり、革命に反対する容疑者を逮捕し、パリの革命裁判所へと送ったのです。反革命勢力への苛烈な弾圧措置から、ルカルパンティエは「マンシュの殺し屋」というあだ名がつけられるのです。

ルカルパンティエは、ロベスピエールが失脚した際に一時投獄され、また国民公会の解散後には故郷に隠遁しますが、彼の人生はこれで終わりませんでした。恐怖政治に対する恨みは、王党派の記憶に深く根ざしていたのです。そのため、ナポレオン帝政の崩壊後、王政復古がなされると、王党派は、国王の処刑に賛成した議員を国王弑逆者として、彼らに対する弾圧を始めます。ルカルパンティエも国外追放の刑に処され、密かに故郷に帰国するものの、最後には逮捕され、モン・サン・ミシエルの牢獄で獄死します。

このように、本書では、ルカルパンティエの生涯を見つめながら、革命前夜から王政復古期までの革命家の生き様が描かれています。ロベスピエールやダントンなどフランス革命を彩る革命家は革命の最中に非業の死を遂げますが、ルカルパンティエは革命に対する反動の時代まで生き残り、最後の国王弑逆者として 70 歳の生涯を終えるのです。このようなルカルパンティエという、世界史の教科書には出てこない革命家の人生を知ること、フランス革命がなし得たこと、そしてその記憶について深く考えることができるのです。

(2) 姦通裁判—18 世紀トランシルヴァニアの村の世界— 秋山晋吾著

星海社 2018 年

18 世紀の東欧のある村で行われた姦通をめぐる裁判が、本書の題材となっています。姦通を犯したのは、村の領主の妻。浮気相手は領主の親戚。浮気現場に踏み込みながらも、逆に反撃をうける夫。浮気を目撃者でもあり、共犯者でもある村の住民たち。夫婦と間男の間の金銭トラブル。このように書くと、ワイドショー的なものを期待される方もいるかもしれませんが、本書はそうではありません。むしろ、姦通をめぐるドロドロした展開にはあまり深く立ち入っていません。著者は『姦通裁判』という刺激的なタイトルを付けながらも、その目指すところは、歴史学という学問を良く知ってもらうために書かれた社会史入門・史料学入門なのです。

さて、歴史学では、過去の人々の日常を研究する分野を「社会史」と呼びます。著者はこの社会史の手法で本書を描いています。ですから、本書の登場人物たちは、教科書に出てくる有名人ではなく、名もなき人々なのです。彼らの裁判証言を材料に、貴族がどのような暮らしをしていたのか、貴族や農民が何時に何度食事をとっていたのか、どのような住居に住んでいたのか、どのような恋愛観をもっていたのか、などなど、当事者たちの人間関係、さらに村の住民たちの心性や生活様式などを明らかにしていくのです。

そして、本書の特徴をもう一つあげるならば、史料を「読み解く過程」に力点がおかれていることです。史料とは、歴史学において事実を確定する証拠であり、基本的には研究対象と同時代に書かれた文字資料のことを指します。本書では、村の住民たちの裁判証言が史料として主に使われていますが、証言にはどのような性質や欠点があるのか、その欠点をどのような種類の史料で補うべきか、歴史的背景においてこれらの証言をどのように解釈すべきか、そもそも証言で語られなかったことをどのように理解すべきかなどなど。まさに、歴史家がどのようなことを考えながら研究を行っているのかがわかるようになっているのです。なお、最後には、意外なオチがまっています。オチについては、ぜひ本書を手にとってご自身で確認してみてください。

Caroline Hutchinson 専任講師
(英語)

Mindset: The New Psychology of Success, by Carol S Dweck

マインドセット — 「やればできる！」の研究 キャロル・S・ドゥエック 著

草思社 2016 年

大きな成功を収めた人を見て、その成功の原因は何だと考えますか？生まれつき才能があるからだと思われるかもしれませんが、懸命に努力をして経験を積むことも成功には欠かせません。本書では心理学の教授である著者が成功と失敗の要因と意味を考察し、成功につながるマインドセット（考え方）を解説しています。

大まかにですがマインドセットは二極に分かれると言えるでしょう。「硬直マインドセット」を持つ人は、自分の能力は固定的で努力しても変わらないと考えます。成長は見込めないと思い込み、努力をして技能を高めるよりも他人から高く評価されることを好みます。失敗をする、低く評価されるということは自身の人間的価値への攻撃として受け取るため、それらを極端に恐れます。

「成長マインドセット」は、「努力すれば基礎的能力も伸ばすことができる」という信念に基づいたマインドセットです。このマインドセットを持つ人は、「失敗は成功の元」と考え、チャレンジ精神旺盛でモチベーションを長い期間維持することができます。

私はどちらのマインドセットの持ち主かを考えさせられました。結論としてはその二つの中間に位置し、場面に応じて考え方が変わることもあります。しかし若いころは「知らない」と言うときには恥ずかしく感じていたので、ある程度失敗を恐れていたのでしょう。日本に来てからは日本語でコミュニケーションを図ろうと努力をしては毎日失敗を繰り返し、子供に戻ったような気分を味わいました。日常会話が思うようにできず、しょっちゅういら立っては諦めようと考えたこともありましたが、時間をかけて確実に日本語力を伸ばすことができました。

私は人間の脳は素晴らしい学習機械だと信じています。「やればできる！」は空虚に聞こえるかもしれませんが、結局のところ、やってみなければ分からないのです。

Collapse: How Societies Choose to Succeed or Fail, by Jared Diamond

文明崩壊：滅亡と存続の命運を分けるもの ジャレド・ダイヤモンド著

草思社 2012 年

現代の先進国に生まれた我々は幸運であり、生存のために全力を尽くす必要などないかのように思われます。過去を知る手掛かりとして謎めいた遺跡をテレビなどでは紹介していますが、近代社会も過去の社会と同様に滅亡する可能性があるなど誰も想像できないでしょう。しかし実際に人々が気候変動の脅威に怯えながら暮らしている世界では、危機標識を常に認識していなければなりません。

歴史学という分野は人名や故事の発生日時などを丸暗記すればよいというイメージを持つ人が少なくないでしょう。しかし人々の過去の行動とそれによって生じた結果をつぶさに分析すれば、現代社会が抱える問題解決の糸口を見出すことも可能です。哲学者のサンタヤナの言葉を借りれば、「過去を忘れる者は、同じ過ちを繰り返すもの」だからです。

著者のダイヤモンドは実例を挙げながら、環境破壊、気候変動、隣国に存在する敵対集団、貿易相手の不在、そしてあらゆる問題に対する不十分な社会的対応という、社会の崩壊の遠因と考えられる五つの事象を述べています。最初の四事象は社会によって異なりますが、対応はどのようなケースにおいても極めて重要です。肯定的な見方をすれば、長期的な計画と柔軟な考え方を持つ社会は問題を克服できるとダイヤモンドは主張します。

現代のルワンダやハイチの情勢からグリーンランドに入植したバイキングやイースター島の謎まで、これまで詳しく知られていなかった興味深い実例を本書では紹介しています。滅亡を防いだ森林の管理制度の例として、徳川時代の日本にも触れています。異説が存在するものもあるため本書に対する批判もありますが、世界史を広い視点で眺める機会を提供してくれる作品として価値があると思います。

Unbeaten Tracks in Japan, by Isabella Bird

日本奥地紀行 イザベラ・バード著

平凡社 2000 年

ここ数年外国人観光客が大幅に増加しており、「諸外国から見た日本」に多くの関心が集まっています。では、近代日本ではなく明治維新直後の日本はどのように見られていたのでしょうか？本書は洞察に富んだ日本の旅行記です。

著者のイザベラ・バードは英国出身で、生来病気がちでした。医者の指示に従い屋外スポーツを楽しみ、成人すると勇気を振り絞って米国、ハワイ、豪州、インド、チベット、トルコ、中国、韓国など多くの国を訪れました。また旅をすることで病気の症状が和らいだようです。旅行家として知られるようになったバードは20冊以上の旅行記を執筆し、そのうちの一冊が「日本奥地紀行」です。

女性が一人で旅をするなどあり得ない時代でしたが、バードは米国のコロラド州を訪れた際に片目の無法者と親しくなるなど、非常に冒険好きでした。日本への旅を計画したときには、当時「未開の地」であった東北と北海道を迷わず日程に組み入れました。明治時代の未開発の日本と北海道のアイヌ民族などの貴重な記録となる旅行記だと思います。

「私は見たままの真実を書いている」というバードの物言いはかなりざつくばらんで、日本人は不快に感じるかもしれません。日本の素晴らしい景色や温泉、日本人のおもてなしなどに心を動かされたようですが、反面、不潔な場所や貧しい人々の困難などについてはかなり否定的に述べています。

一方的な見方で人種差別的な発言もしていますが、見聞きしたものを赤裸々に語るバードの言葉に偽りはないと言えるでしょう。意志の強い外国人女性旅行者の目を通して明治11年の日本を経験できる、非常に興味深い記録です。

令和元年度のまとめ

○利用数

入館者数 231,577 名 (2018 年度 228,715 名)

貸出冊数 12,153 冊 (2018 年度 12,528 冊)

前年度と比較して、貸出冊数は微減ですが、入館者数は増加しました。

○デジタルコンテンツ

2019 年度に経済学部導入された、オンラインデータベース・電子ジャーナルです。

官報情報検索 サービス

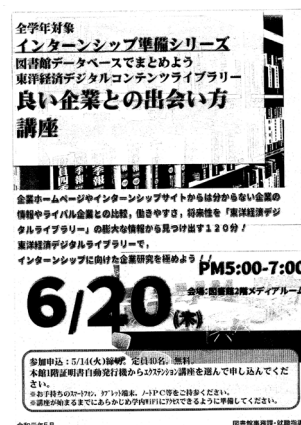
昭和 22 年 5 月 3 日分から直近までの官報の内容を、日付やキーワードを指定して検索・閲覧できるサービスです。利用は館内指定端末からになります。



12 月に Maruzen e-Book Library が全学版となり、他学部が購入していた電子ブックが利用できるようになりました。経済学部 OPAC から利用可能で、学外からは学認経由できます。

○ガイダンス・利用講習会

- ・ 4 月から 6 月にかけて、基礎研究図書館ガイダンスを 91 クラスの学部新生を対象に行いました。(学生アンケート結果は後ろにあります)
- ・ 4 月 6 日 (土) に専門研究図書館ガイダンスを経済学研究科の新生 32 名に行いました。
- ・ 6 月 20 日 (木) 17 時～19 時に、就職指導課と共同開催のデジタルコンテンツの利用講習会「良い企業との出会い方講座:図書館データベースでまとめよう東洋経済デジタルコンテンツライブラリー(全学年対象インターンシップ準備シリーズ)」を東洋経済新報社の西村雄吉氏を講師に迎えて開催し、31 名の学生が参加しました。



○学生選書ツアー

- ・6月27日（木）13時から17時に、経済学部と法学部合同の選書ツアーを三省堂神保町本店で開催しました。

参加者は経済学部6名（4年生1名，3年生3名，1年生2名）法学部6名でした。

法学部の図書館サークルのメンバーが企画・運営に関わり，一目惚れした本というテーマでのテーマ選書と自由選書を行い，ビブリオバトルなどを通して参加者が交流しました。



- ・11月9日（土）13時から18時に、法学部，経済学部，理工学部，歯学部，生物資源科学部，薬学部合同選書ツアーを三省堂神保町本店と理工学部お茶の水校舎3階リーディングルームで開催しました。

参加者は6学部合わせて42名，経済学部からは3名が参加し，9班に分かれて選書後は『直観読みブックマーカー』という企画で参加者が交流しました。



○ゼミナール研究成果の展示

図書館4階のエレベータホールに，以下の2つのゼミナールの研究成果の展示を行いました。
これらの展示は，企画，打合せ，資料収集，展示作業に学生がかかわる学生協働の展示です。

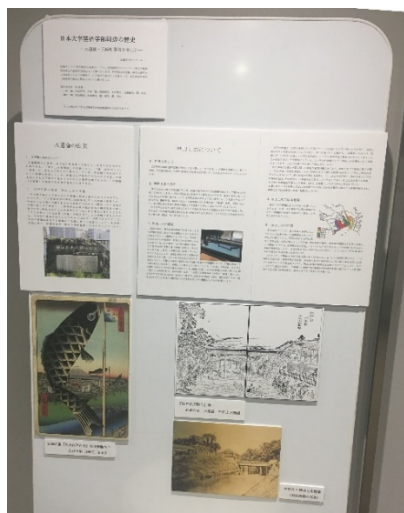
- ・中川雅之ゼミナール：

公共政策フォーラム参加・受賞の記録をもとにした展示
(7月中旬から10月中旬)



- ・武蔵亮平ゼミナール：地域連携室と連携した神田三崎町の歴史の展示

(9月中旬から10月末)



○本の展示

- ・各賞を受賞した本と関連図書の展示

「芥川賞・直木賞受賞本」「本屋大賞受賞本」「日経経済図書文化賞受賞図書」「ノーベル賞受賞関連図書」の展示をおこないました。



- ・テーマ展示

「オープンキャンパス公開講義関係図書」「選書ツアーで選書された本」「先生のおすすめ本」「学生協働・イベント関係」「中村靖彦先生おすすめの数学の本」「図書館サークルのおすすめ本」「新着図書」などイベント開催に合わせた展示と時々のテーマで展示を行いました。



- イベント

図書館サークルの学生と図書館が協働し、先生方の協力をいただいて公開ゼミなどの各種イベントを開催しました。

- ・図書館活用相談会「レポートの書き方」(佐藤温専任講師)

7/1 (月)・7/3 (水)・12/16 (月)・12/19 (木) 12:30-12:55



- ・図書館トークイベント「出版の歴史：中世写本の世界」(杉藤久志准教授)

7/4 (木) 16:30~17:50



- ・公開講義（映画上映会）「ル・アール・オブ・ザ・靴磨き」（金田耕一教授）

6/25（火）17：00～20：00

- ・公開講義（映画上映会）「スリー・ビルボード」（金田耕一教授）

10/17（木）17：00～20：00

- ・公開講義（映画上映会）「インヴィクタス」（金田耕一教授）

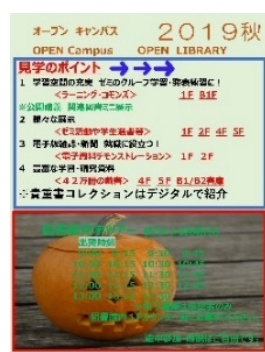
11/21（木）17：00～20：00

- ・映画上映会「裏窓」（杉藤久志准教授）

12/17（火）16：30～19：30

○オープンキャンパス

- ・夏：7月14日（日） 見学ツアー参加者105名，自由見学者419名 合計524名の参加がありました。



- ・秋：10月6日（日） 見学ツアー参加者183名，自由見学者266名 合計449名の参加がありました。初めて，図書館サークルの学生3名が学生スタッフとして，ツアー引率等の見学者対応を行いました。

○高校生図書館開放

8月2日（金）から9月12日（木）に高校生へ図書館を開放しました。図書館のウェブサイトとオープンキャンパスでの告知、近隣の高校への広報活動、千代田図書館、千代田区掲示板、経済学部最寄り駅へポスター掲示を行い、登録人数22名、のべ75名の利用がありました。



○所蔵資料の出版

- ・2019年10月9日（水）～15日（火）に丸善・丸の内本店4階ギャラリーで開催された「西洋の名著と日本の出会い」へ「マルサス 人口論」と「ケネー 経済表（第3版）」を出展しました。展示会への来場者数は約2000名とのことでした。

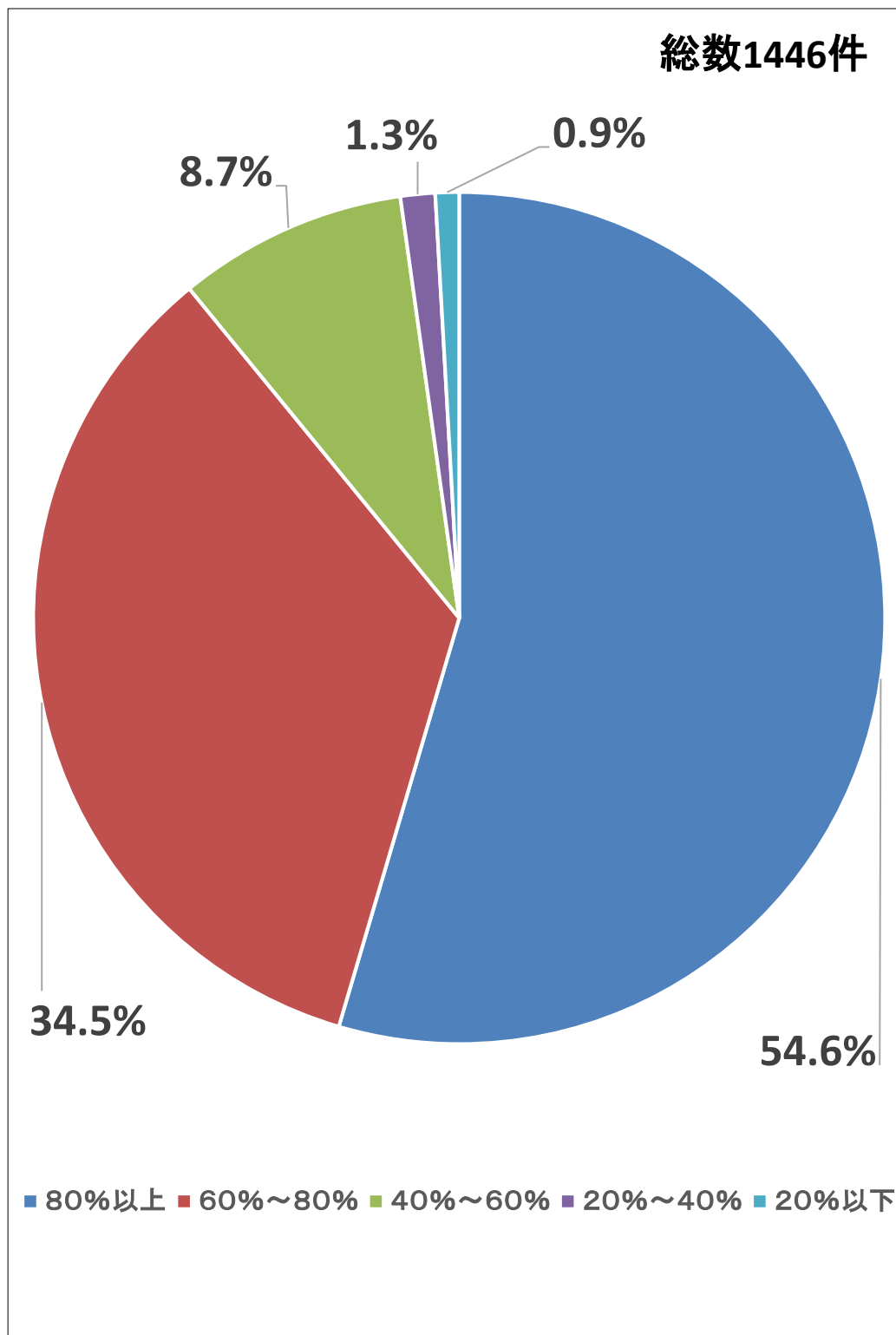


- ・令和2年1月20日（月）～3月24日（火）に法学部分館1階展示ギャラリー・学生ラウンジで開催された「アダムスミスとその業績（日本大学法学部創設130周年記念展示会第2期）」に、アダム・スミス関連デジタル画像4点と「An Inquiry into the nature and causes of the wealth of nations」, 「Recherches sur la nature et les causes de la richesse des nations」を出展しました。

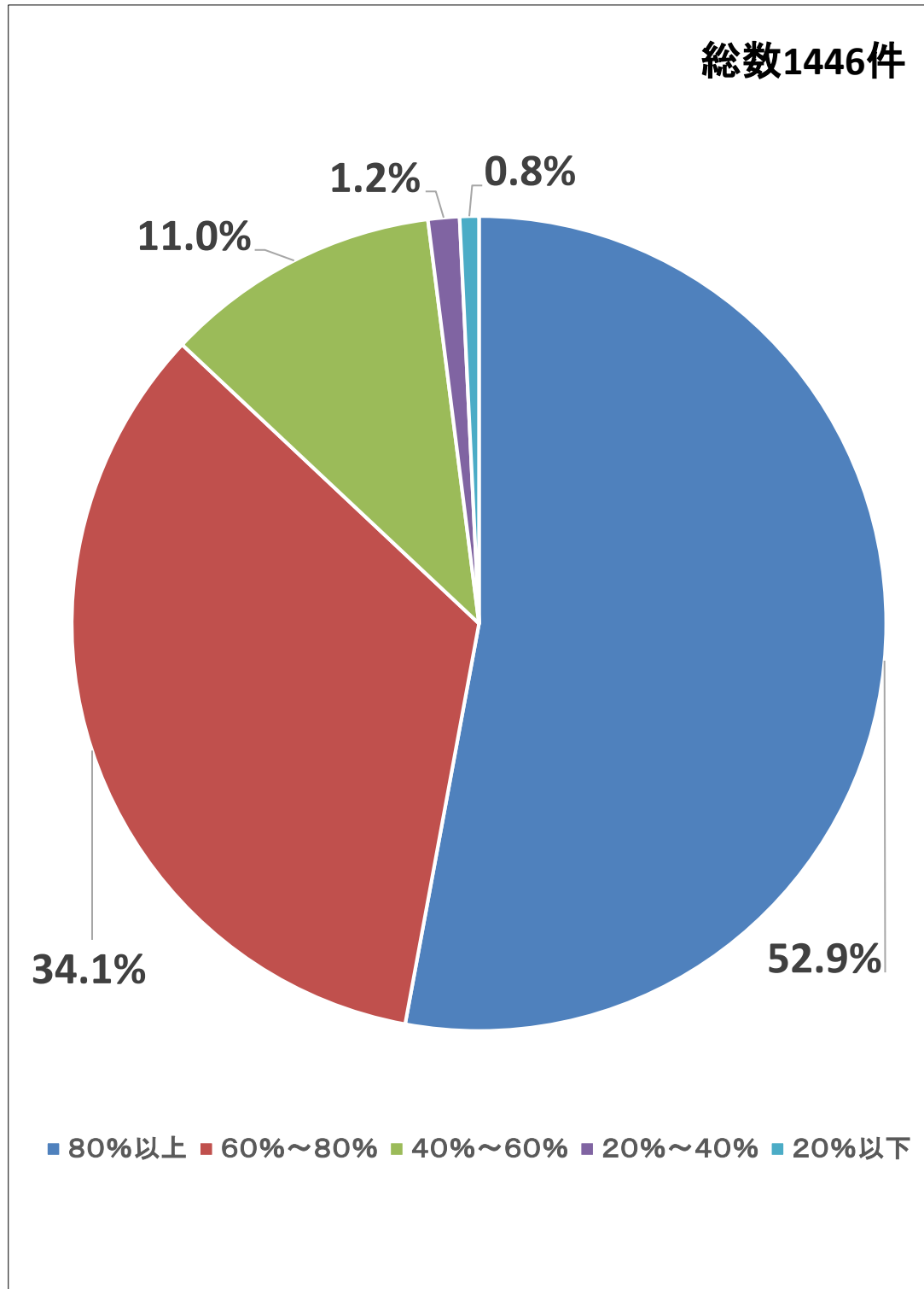


令和元年度 図書館ガイダンス(基礎研究)アンケート結果

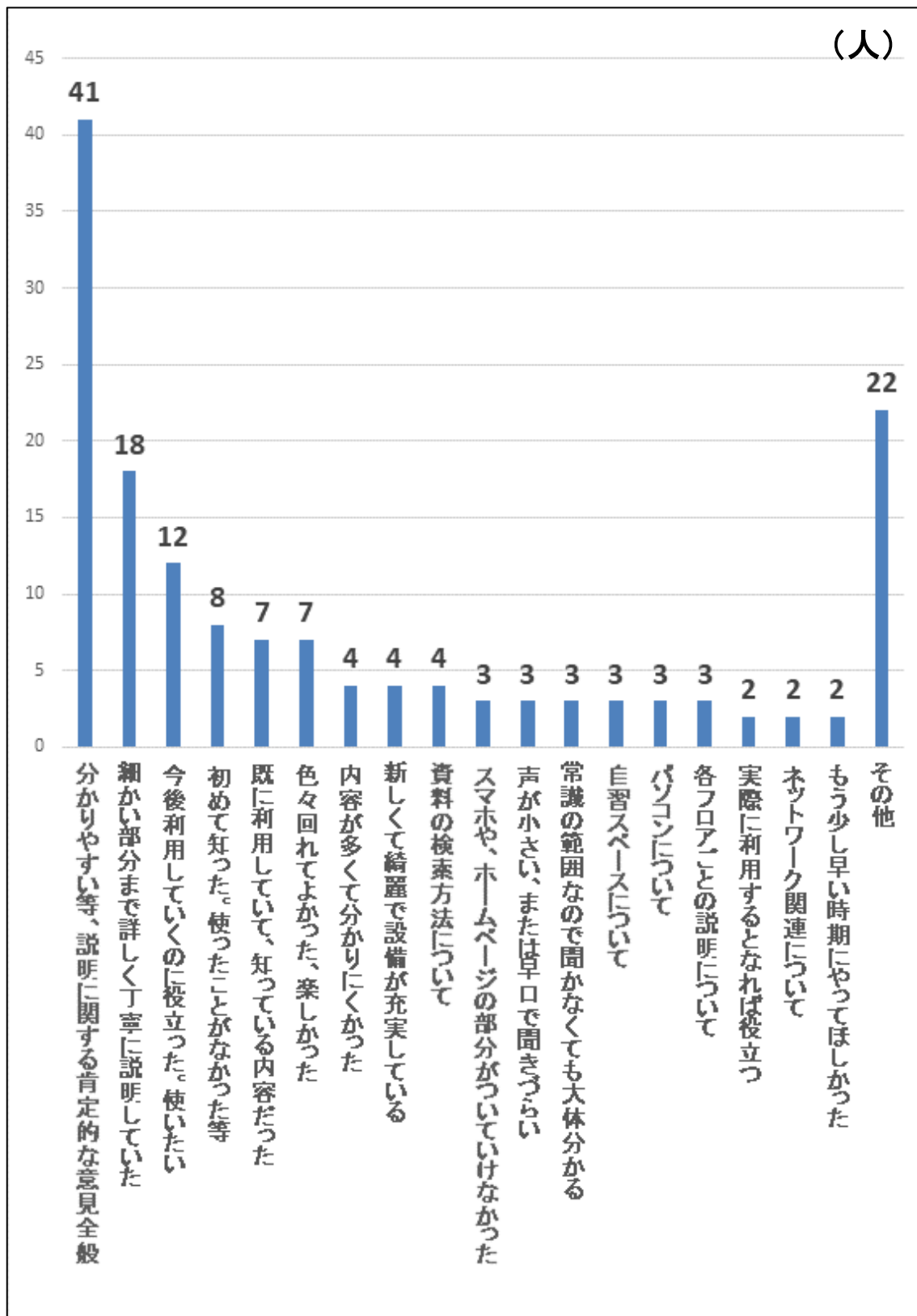
1.『図書館内見学ツアー』について(理解度)



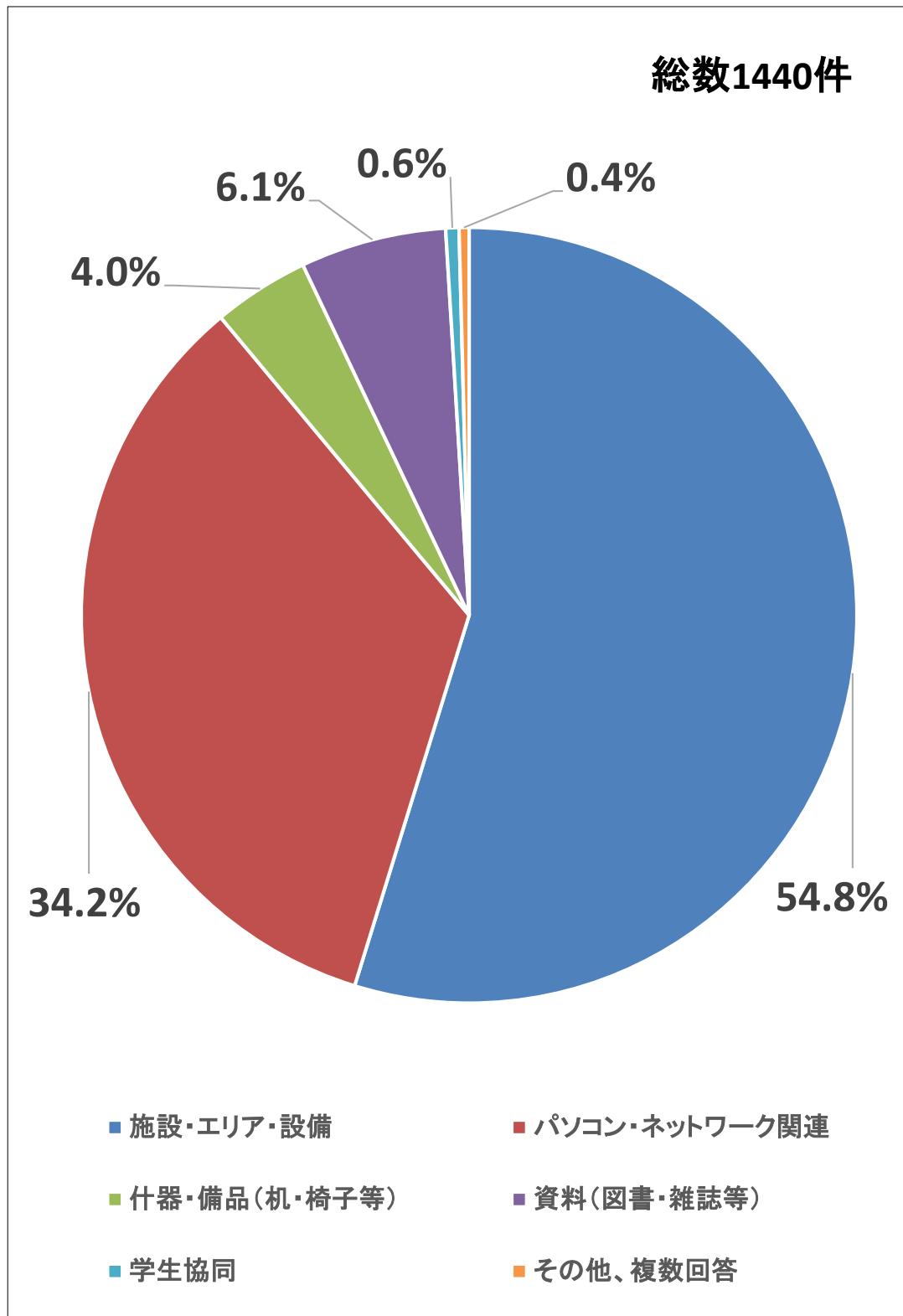
2.『図書館内見学ツアー』について(『お役立ち度』)



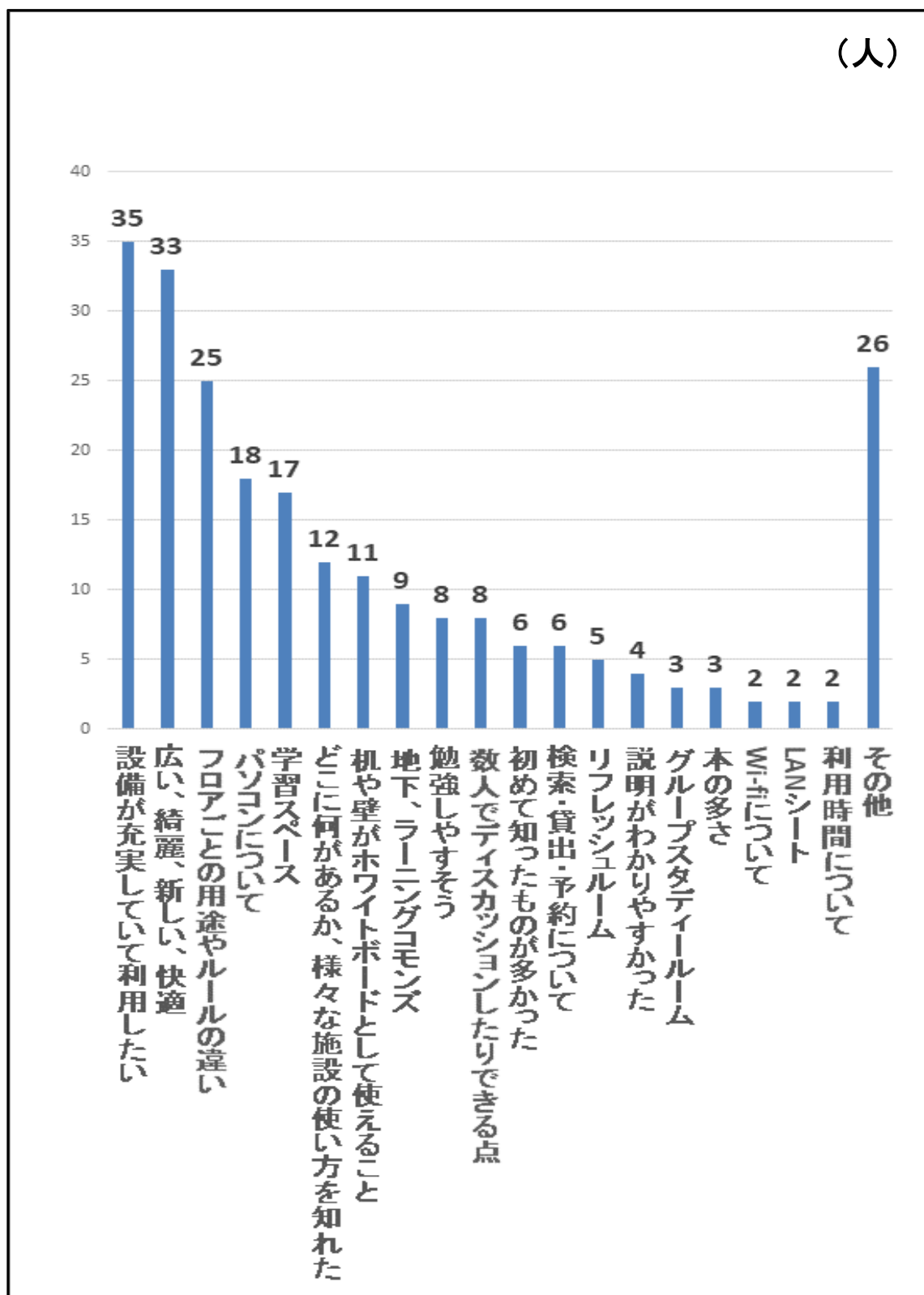
3.『図書館内見学ツアー』について(回答理由)



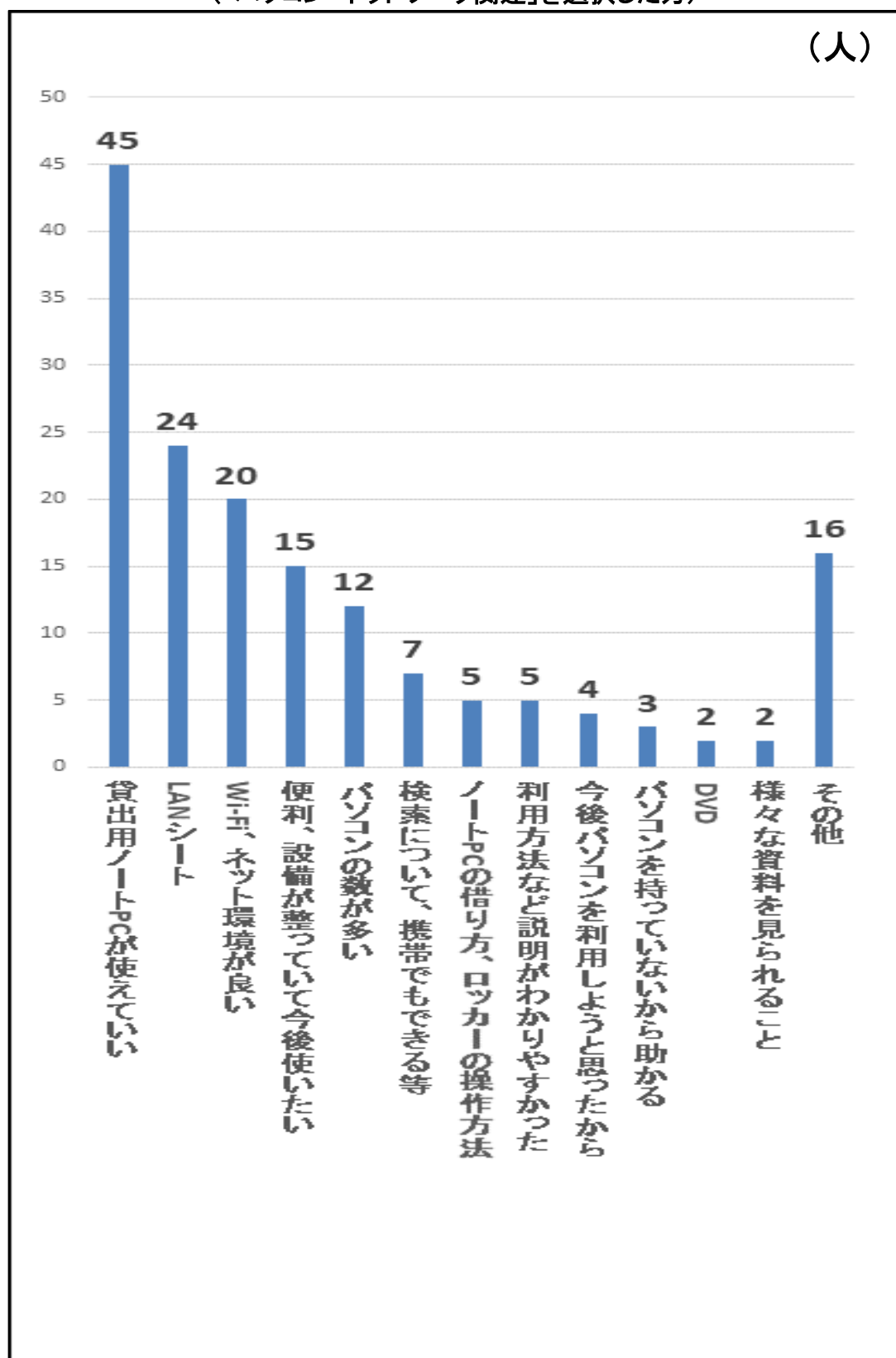
4.『図書館内見学ツアー』で最も印象に残ったことをご選択ください



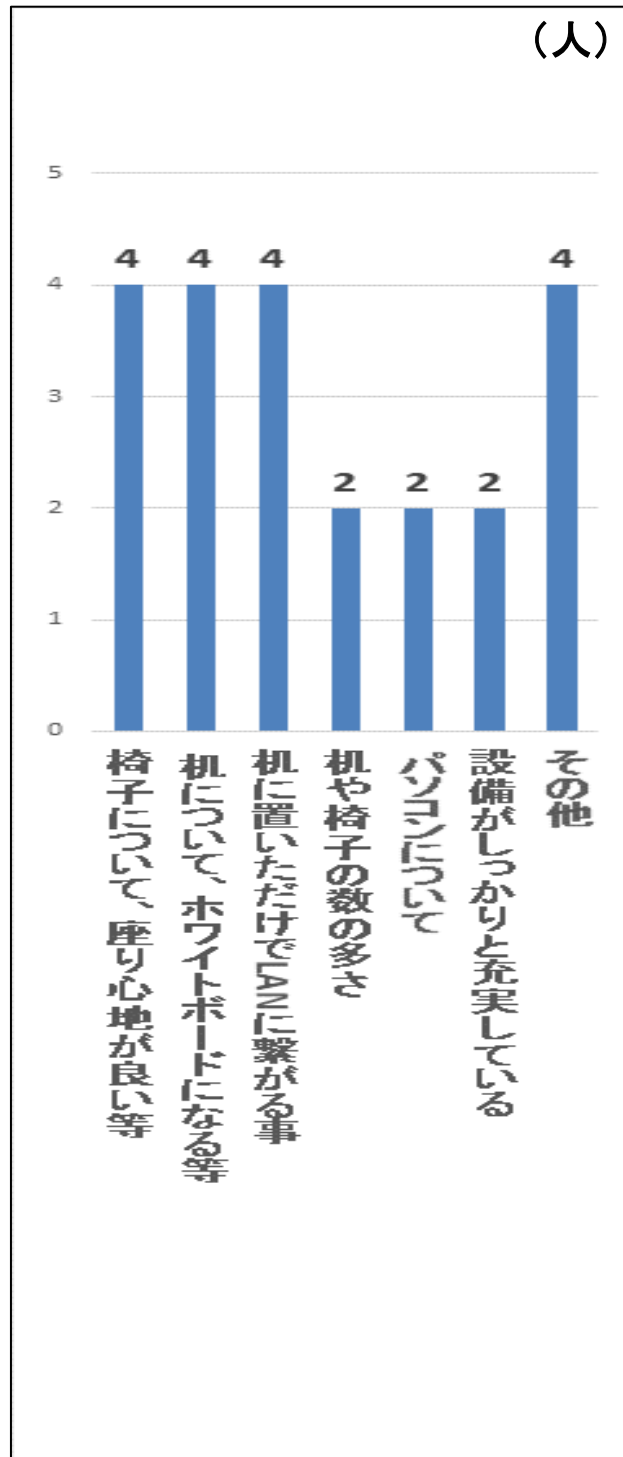
5.『図書館見学ツアー』で印象に残ったことの具体的な内容
 (「施設・エリア・設備」を選択した方)



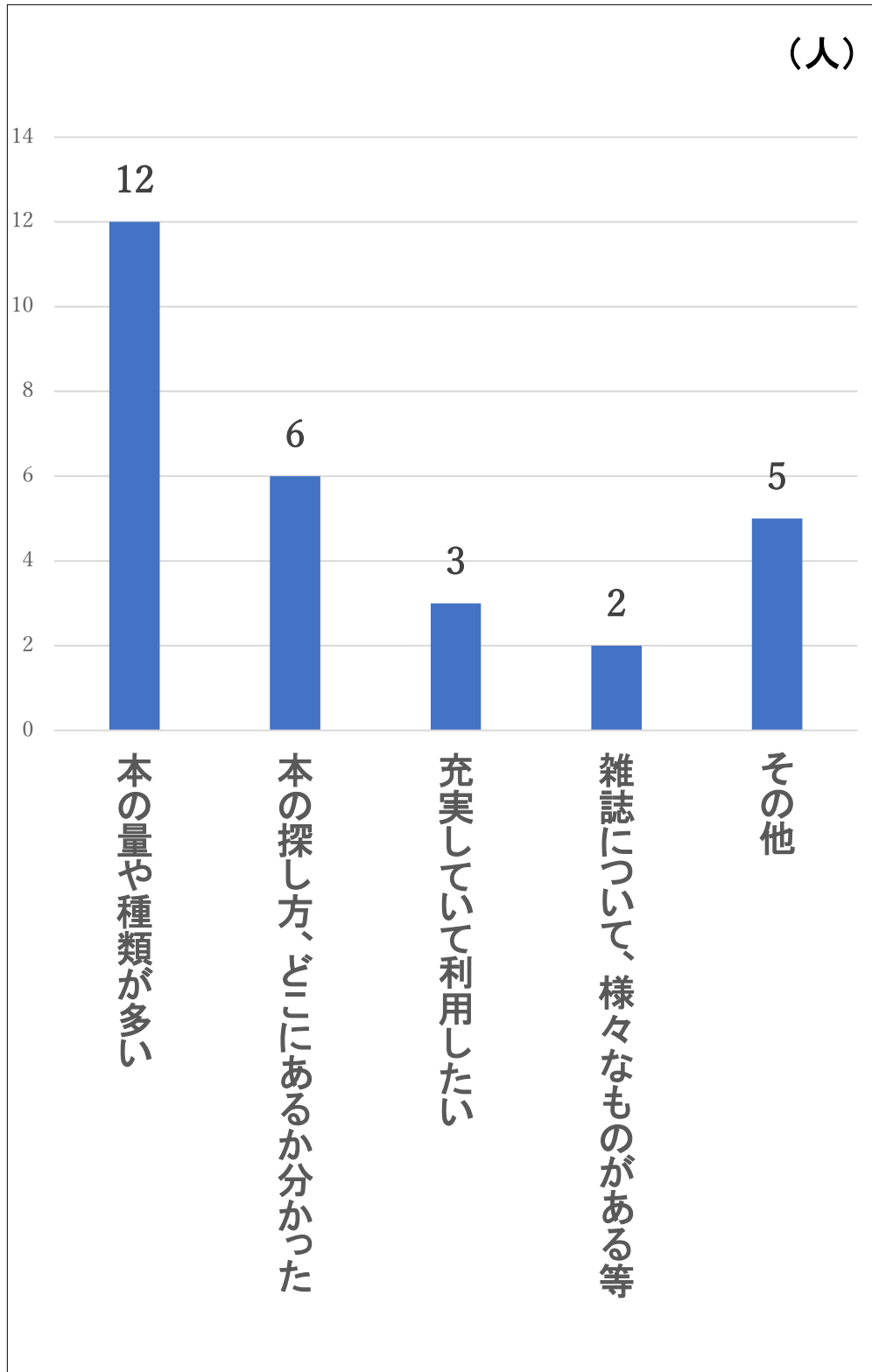
5.『図書館見学ツアー』で印象に残ったことの具体的内容
 (「パソコン・ネットワーク関連」を選択した方)



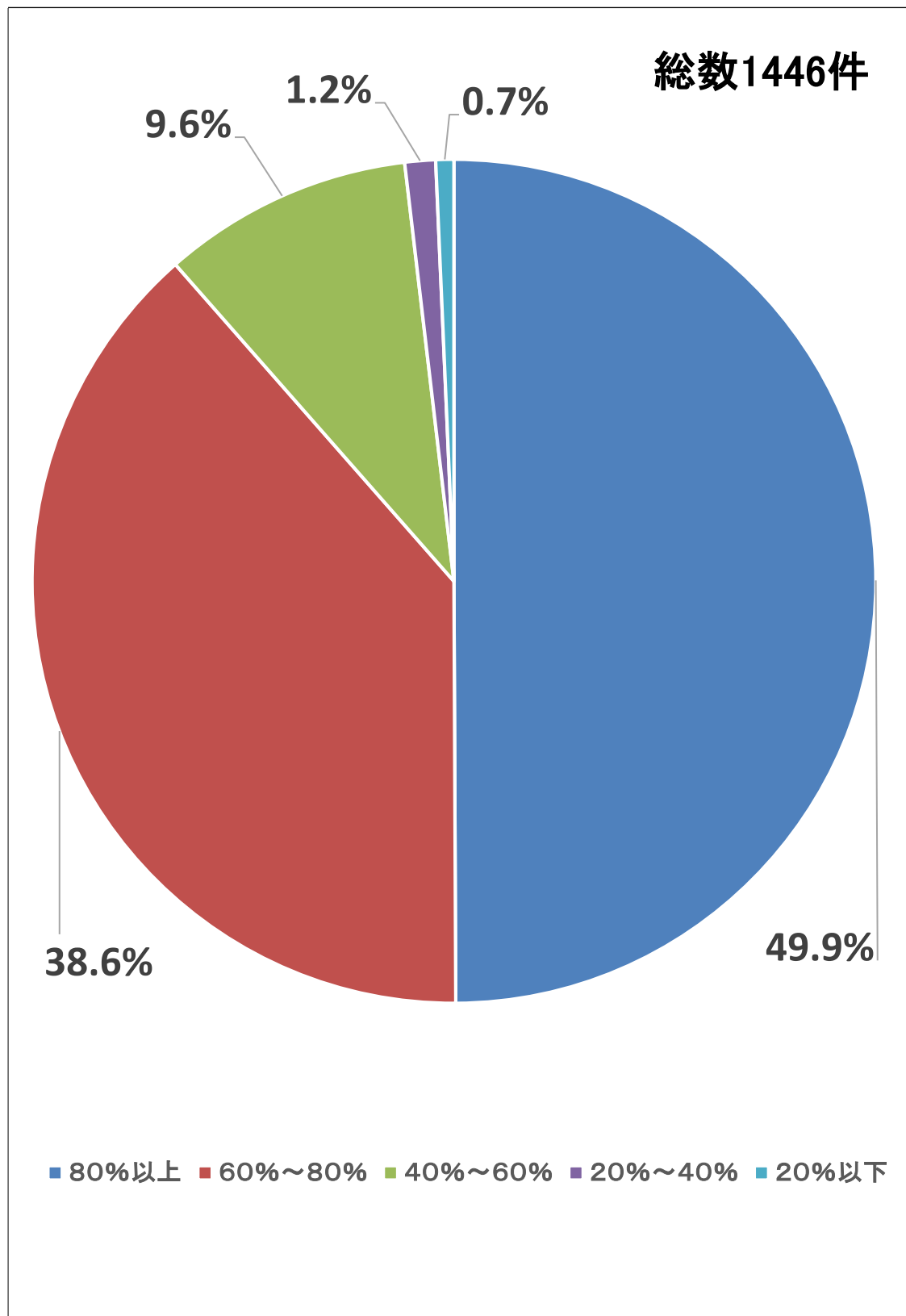
5.図書館見学ツアーで印象に残った事の具体的内容
 (「什器・備品(机・椅子等)」を選択した方)



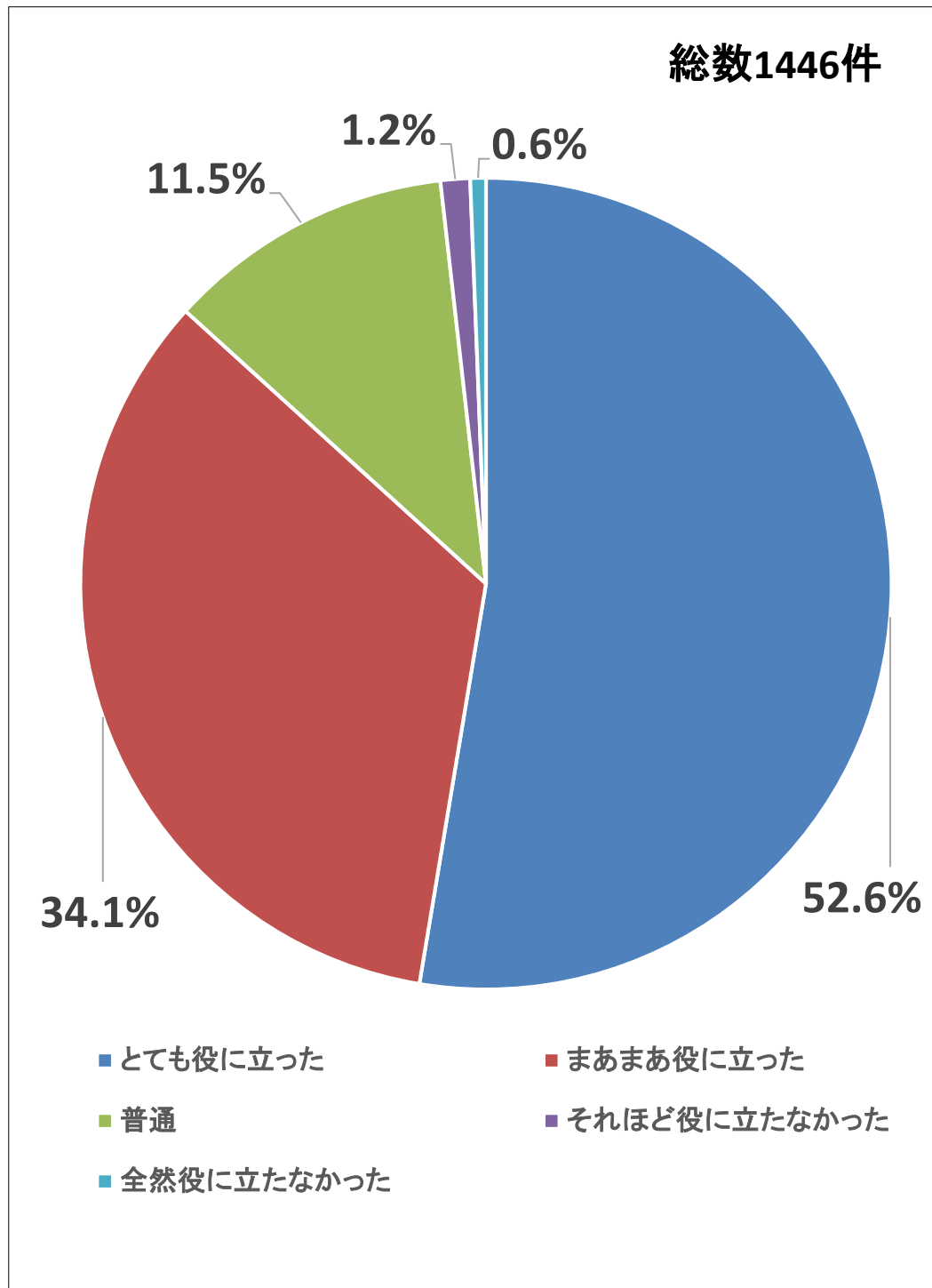
5.図書館見学ツアーで印象に残った事の具体的内容
(「資料(図書・雑誌等)」を選択した方)



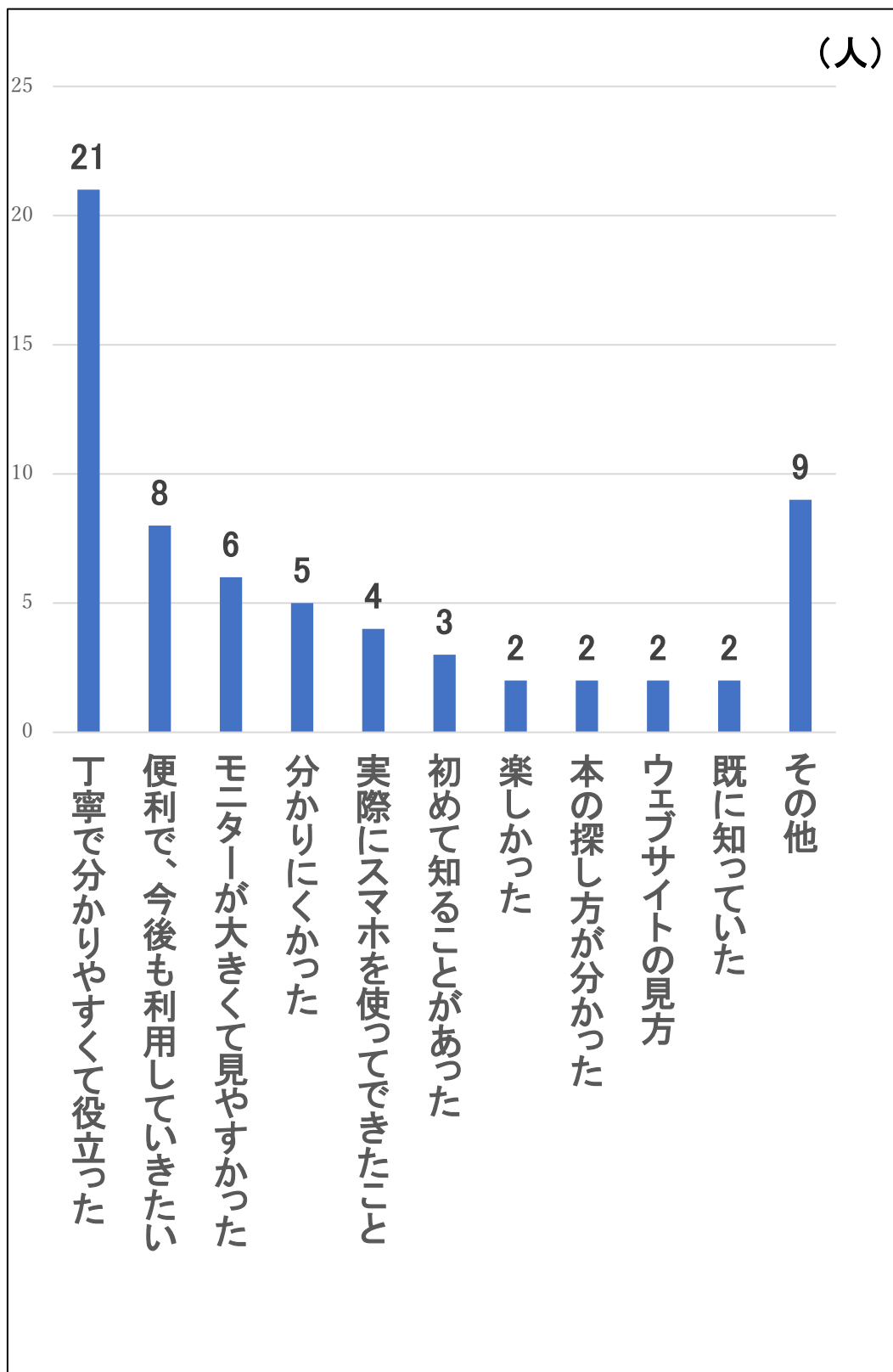
6.『図書館利用説明(講義型)』について(理解度)



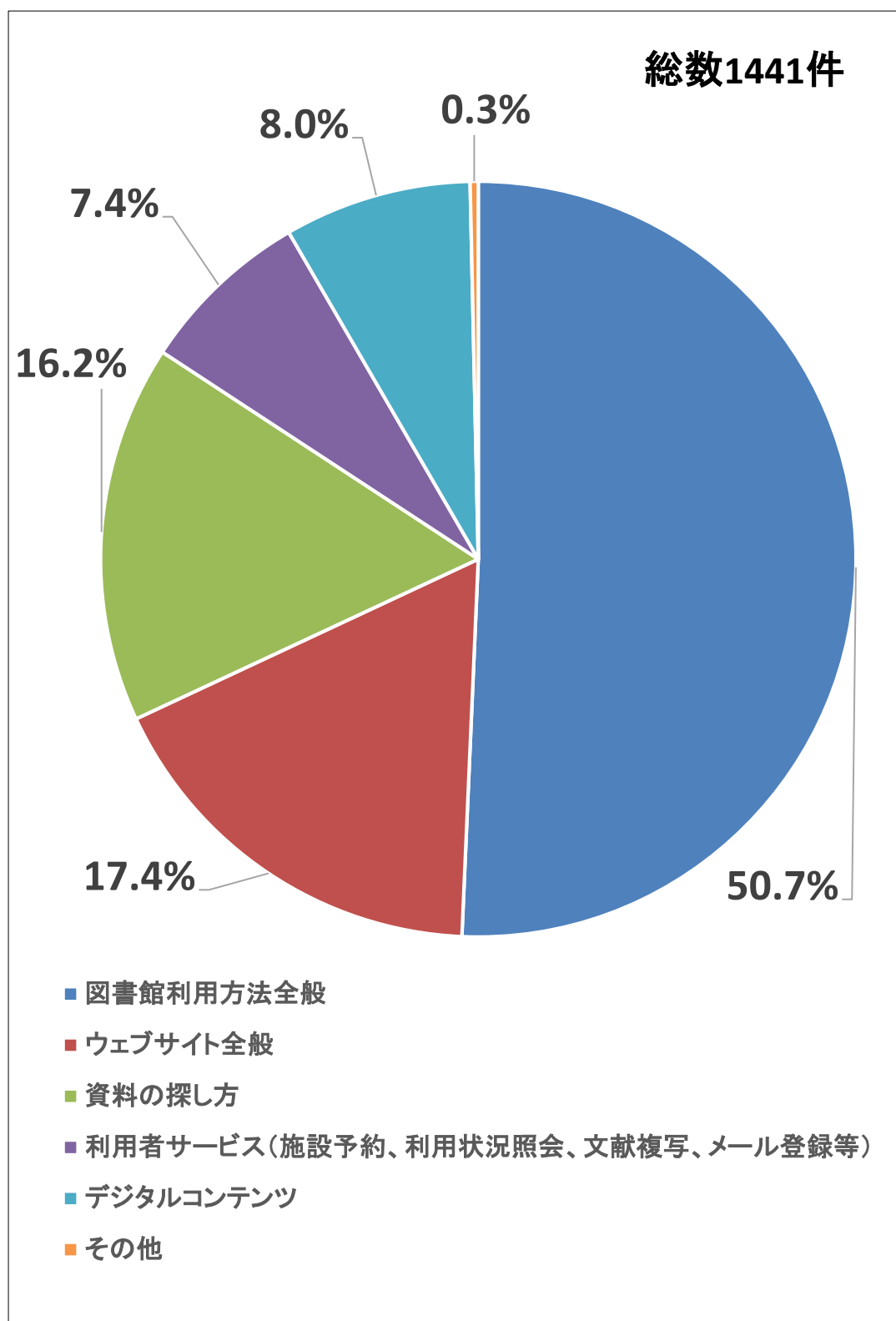
7.『図書館利用説明(講義型)』について(お役立ち度)



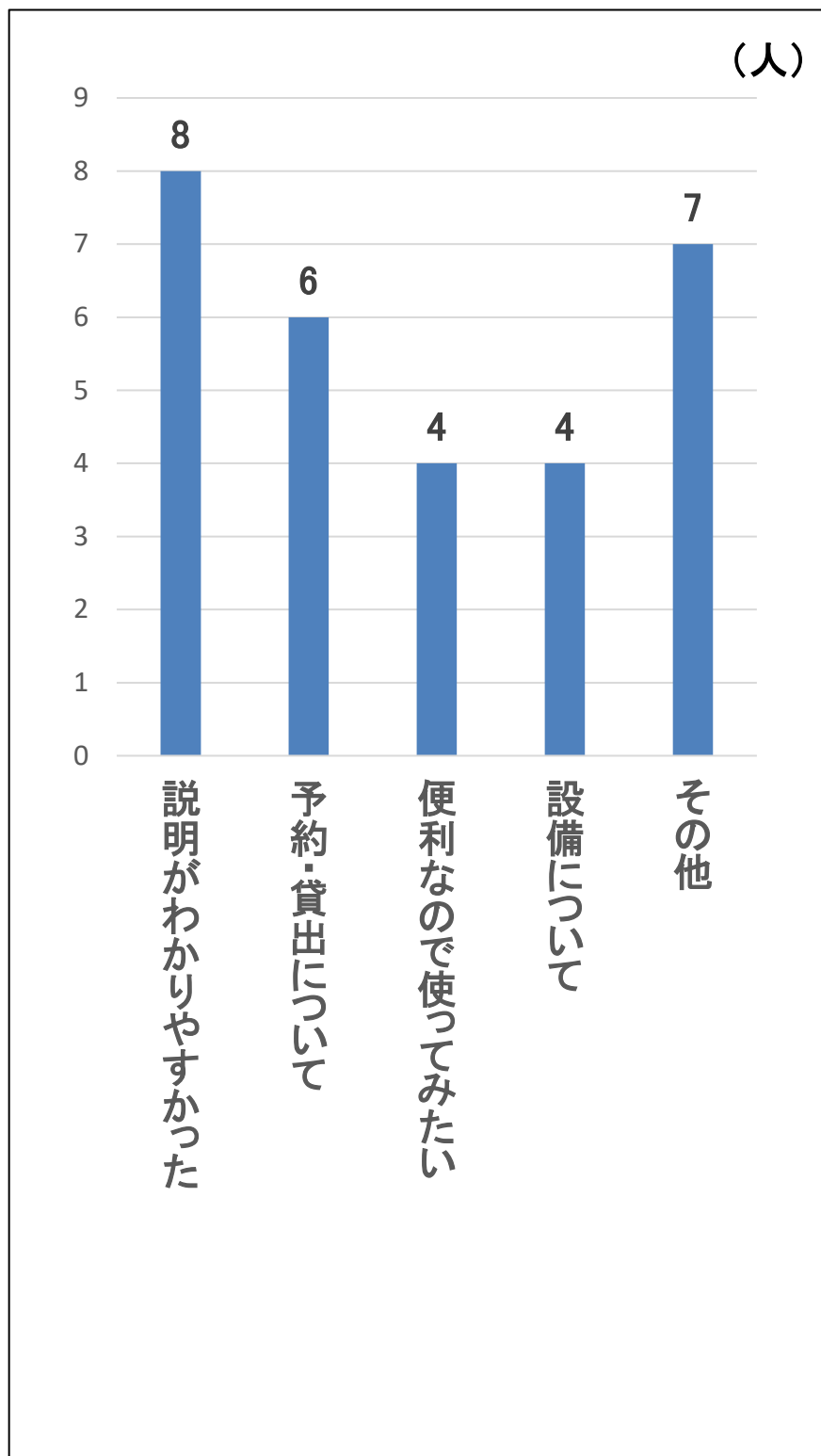
8.『図館利用説明(講義型)』について(回答理由)



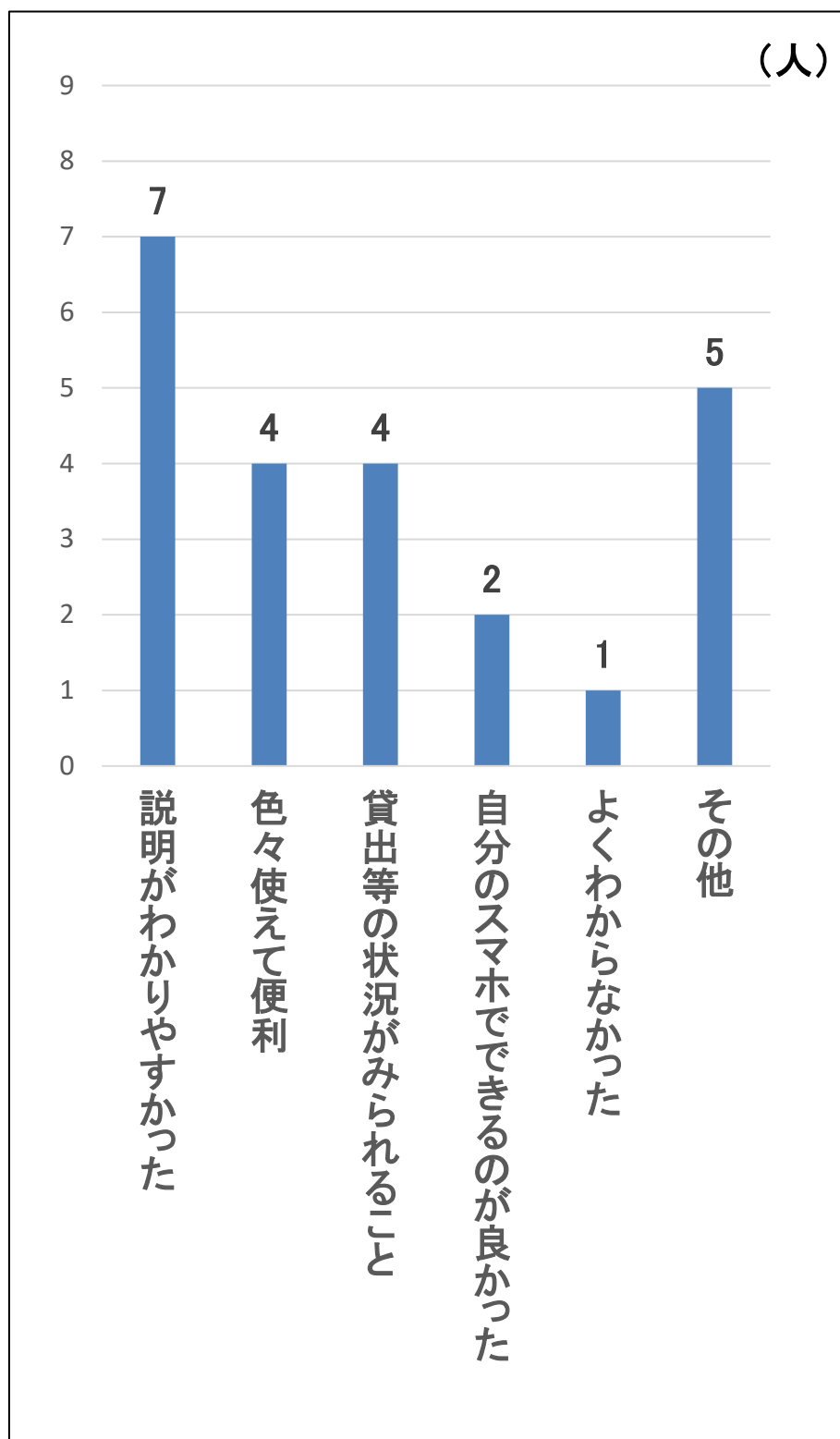
9.『図書館利用説明(講義型)』で最も印象に残ったことをご選択ください



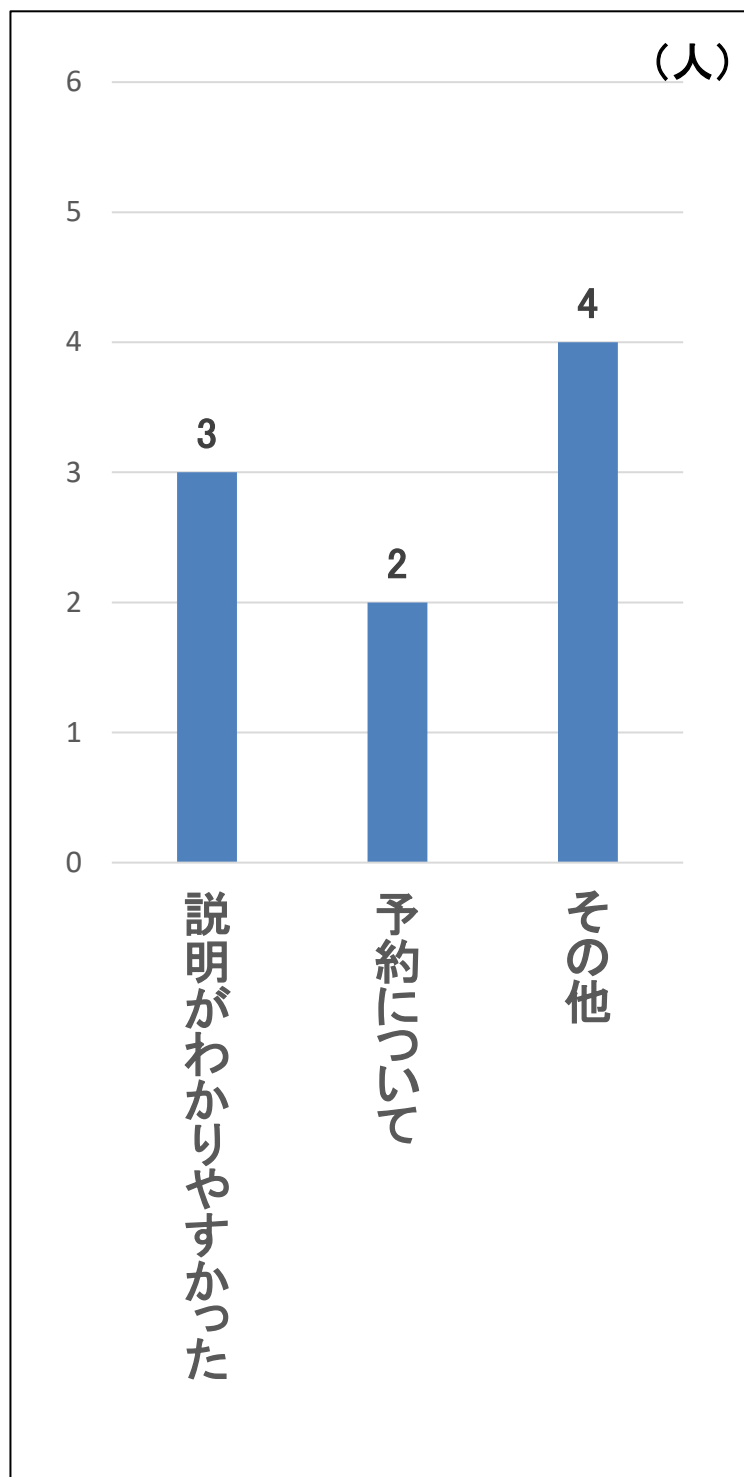
10.『図書館利用説明(講義型)』についての具体的な内容
(図書館利用方法全般を選択した方)



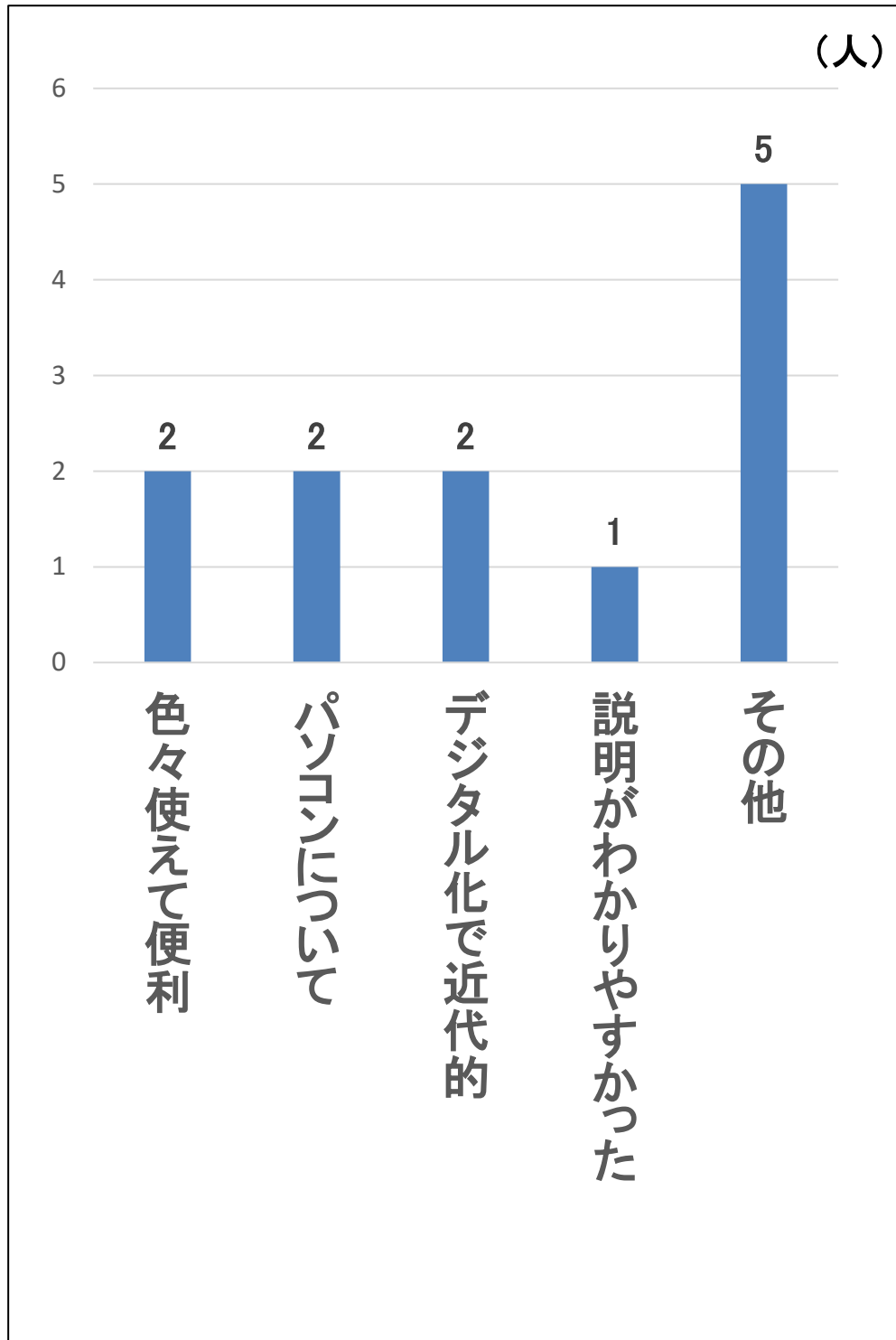
10.『図書館利用説明(講義型)』についての具体的な内容
(ウェブサイト全般を選択した方)



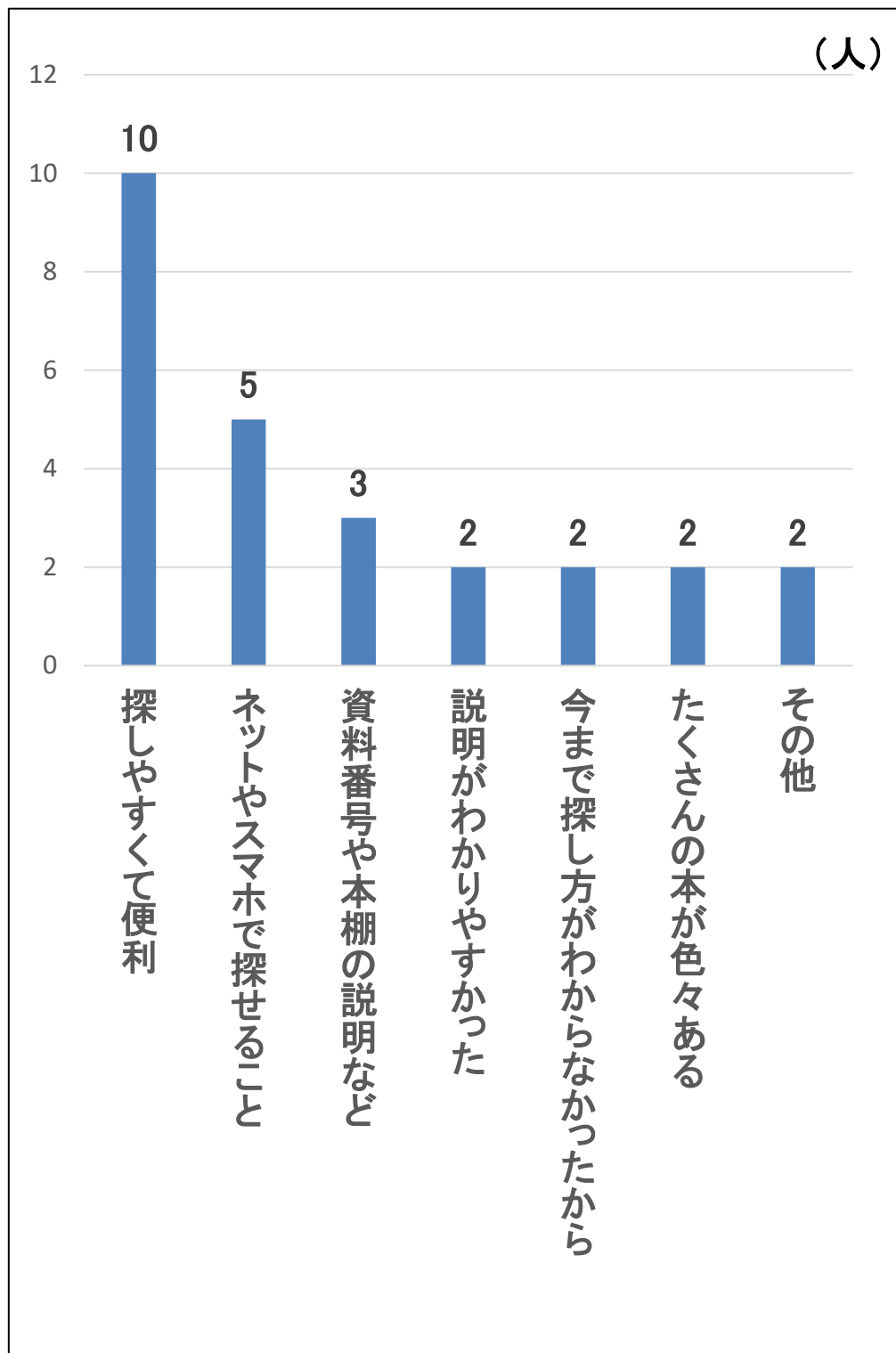
10.『図書館利用説明(講義型)』についての具体的な内容
(利用者サービスを選択した方)



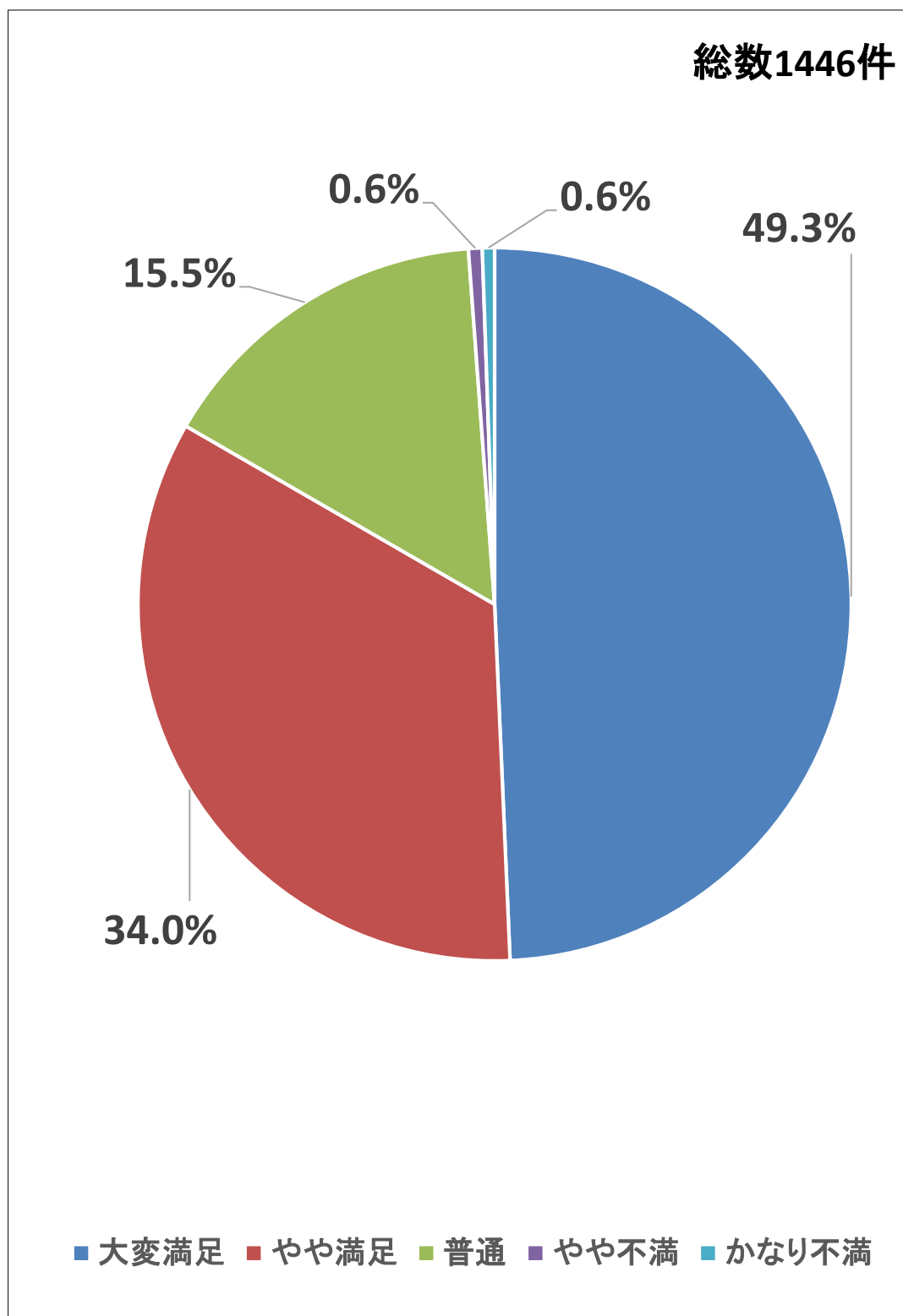
10.『図書館利用説明(講義型)』についての具体的な内容
(デジタルコンテンツを選択した方)



10.『図書館利用説明(講義型)』についての具体的な内容
(資料の探し方を選択した方)



11.ガイダンスの内容(全般)についてどう思いましたか？(満足度)



12.その他ご意見・ご感想等ありましたら、ご自由にご記入ください。

